

転生完了～って、えつ
!? 転生先ってインフィ
ニットストラトスじや
なかったっけ?!

如月 靈

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時、ごくごく普通の軍オタ主人公は交通事故で死に、女神の前で言われたのは
『間違つて殺しちゃいました』

だつた。そして主人公は転生したがそこは初めの転生先とは違う第二次世界大戦前
の大日本帝国だつた。ここでも女神は間違えていたのだ。

しかし、主人公が戦死すると元の転生先に転生することを女神は隠していく…
※神様が転生先を間違えて、いくつかの世界に転移してIS世界に転移する話

目次

第六話 激戦！レイテ沖大海戦 !!

28

プロローグ | 1

大日本帝国編

第一話 転生完了！って、あれ？：あ

のクソ女神イイイ!!!!!!

7

第二話 第二十八駆逐隊の戦い

12

第三話 昇格と戦艦土佐 | 16

第四話 航空戦艦土佐 出撃！ミッド

58

ウエー！

第五話 レイテ島に単艦で出撃だ

24

とオオ!!!

ハイスクールフリート編

設定（仮）

第七話 転移と航空戦艦土佐 | 43

第八話 天城型巡洋戦艦

第九話 説明と交渉

第十話 ブルーマーメイド横須賀女子

学園

第十一話 猿島の撃沈と晴風と

54

第十二話 土佐が反逆艦つてどういう

61

第三話	土佐	対	アドミラルシユ	97
ペー				65
第十四話	明乃との別れと戦地に向か			104
う土佐				68
第五話	航空戦艦土佐の奮戦			72
設定				80
第十六話	神界再び			76
インフィニット・ストラトス編				
第十七話	零、IS世界に現れたり			87
の	ザ			108
第十八話	零、見ゆ			92
第十九話	入学試験の戦闘狂と軍神			
第二十話	妹との再開と自己紹介			124
第二十一話	休み時間とお決まりの挨拶を			
第二十二話	イギリス貴族とのイザコザ			
第二十三話	部屋と零と			112
第二十四話	歴史の教科書に載つてんのかよ!!			116
第二十五話	クラス代表決定戦			120
第二十六話	クラス代表パーティー			

132

第二十七話 中国娘の襲来

第二十八話 食堂

第二十九話 対戦相手発表

第三十話 クラス代表戦

第三十一話 一、二組合同授業

152 146 141 137

160

プロローグ

「早く行くぞ！」

友達が僕に話しかけて来た。こいつは自転車通学で共に帰る友達で軍才タ通の花和木刃（かわぎ ジン）だ。

「ああ！今行くよ！」

それに僕は大声で返事をして自転車をこぎ、追いかけた。

◇◆◇◆◇◆

「しつかし、今日宿題多いな～」

刃はハンドルを片手で運転しながら数学のプリントを反対の手で持ちながら嘆いた。

「本当、本当。けどやらんといかんでしよう？ 花和木刃大尉？」

それに僕は少し嫌みに返す。すると刃も少し嫌みに返してきた。

「それもそうですな。矢矧長門少佐？」

「「ぷふツ！ ハハハ！」

花和木がそう言い終わると二人は大声で笑つた。

その約30秒後。長門達がいる歩道に一台の車が突つ込んで來た。

「なっ！グワッ！」

そして長門に車は衝突したのだつた。

ヤベエー…意識が…

薄れ行く意識の中で長門はかけよつてくる刃が目に入った。

一言でも…最後に…！

そう意気込んだ長門は最後の力を振り絞り声を発した。

「僕、は……こんな……死にかた、嫌だね……」

言い終わると同時に僕の意識が途切れた。

◇◆◇◆◇◆

やあ、はじめて。改めて自己紹介しようか、僕は矢矧長門（やはぎ ながと）、連合艦隊旗艦長門型戦艦一番長門の名前と事実上の最後の連合艦隊旗艦を勤めた阿賀野型重巡洋艦三番艦矢矧の名前が自慢という普通な高校生の軍事オタクだ。うん、普通だと思っていた。なんでかつて？そりやあ、辺り一面真っ白い空間に突然いたら自分の頭を疑うでしょ？

「うん、これは夢だ！・そうと決まれば、おやすみ」

僕が横になつて眠ろうとしたその時、目の前に一人の女性が現れて叫んで來た。

「ちよ、夢じやない！・夢じやないですよ！」

うるさいなあ～というか：誰？

「あっ、私は女神のアテネって言います」

へえ～女神なんだ。：

「つて！えつ！女神？てか、何ナチュラルに人の思考読んでんだよ！それに僕なんでここに来てんですか！」

急に思考を読まれている事がわかつた長門は叫んだ。

僕がそう言うとアテネは急にDO・GE・ZA！をして來た。

「すいませんでした！・実は…私が間違つて殺しちゃいました！」

それを聞いた長門は、アテネの胸ぐらを掴んで怒鳴り出した。

「なに殺してくれとんじやおんどりや！」

「ヒ！ヒイ～！」

「何なんだよ！・青春の真っ只中だよ?!どうしてくれんのさ！」

長門の勢いに負けてアテネは、屁理屈を言つた。

「だつて、間違えちゃつたんだもん…」

「ん？」ギロツ

「転生させるから！特典付けて小説世界でも転生させるから～、許して～！」

「言つたな？チートをくれると言つたな？よし！転生する！」

それを聞いて直ぐに僕はアテネの胸ぐらを放した。

「そんじやあ転生後の世界の説明と転生特典をカムカム！」

するとアテネは何処からかノートパソコンを出してきて転生先を確認し出した。

「え～っと、転生させるのはインフィニットストラトスの世界ですね」

「いいな、面白そうだ。あ！忘れかけてた。チートは？転生特典は！そう思つた僕はアテネに質問をした。

「ねえ、神様。転生特典は？」

「転生特典は……そうですね。いくつでもいいので選んでください」

「えつ…マジで？いくつでもいいの？」

「いいのですよ～こつちのミスですしおすし」

へつ、へえ～（汗

「ならさ、身体能力とか指揮能力とか頭脳をMAXまで高めてくれない？あと創造能力もね」

「以上でいいの？」

転生特典を言い終わるとアテネが聞き返してきた。

「以上で」

「いいですね～それじゃあ転生行きましょうか」

アテネはそう言うと転生の扉を開けた。そしてその扉の中に入ると直ぐに意識が持つていかれた。

大日本帝国編

!!!!!! 第一話 転生完了～つて、あれ？…あのクソ女神イイイ

やあ、久しぶりだね。アテネに間違つて殺された矢矧長門だよ。
ん？今どこにいるかつて？それがさ…

8 第一話 転生完了～って、あれ?…あのクソ女神イイ!!!!!!

昭和の軍事施設の前みたいなんだよねえ〜

僕の転生先つてインフィニットストラトスじゃなかつたつけ?!ここどう見ても昭和の海軍施設前だよ!?

長門が混乱して頭を抱えて居ると空から一通の手紙が落ちてきた。

「なんだこれ」

『拝啓 千夏君。ごめんね、またミスつて転生場所間違えちゃった。君が転生したのは第二次世界大戦前の大日本帝国だよ、それにそこは呉鎮守府だから。取り敢えずガンバ! そつちでまた時を見計らつてインフィニットストラトスの世界に転生させるから大丈夫だよ! 歴史改変してもいいからね。』

p. s. 転生してからの名前は夜月雫だから間違えないでね!』

(口。) ?ハ?

雫は手紙をみて一瞬固まつたが、直ぐに怒りがこみ上げて来て大声で叫んだ。

「あんのクソ女神イイイ!!!

叫び終わると雫は疲れはてて愚痴を呟いた。

「マジかー」

「海軍にでも入るか?」

そう言うと雫は目の前にあつた呉鎮守府に入つていつた。

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

あれから1年半後、零は兵学校を主席という位で卒業して島風型駆逐艦『島風』を旗艦とした初春型駆逐艦『夕暮』『若葉』、朝潮型駆逐『朝潮』『山雲』を配下に置く第二十八駆逐隊の艦隊司令兼島風艦長に少佐として着任していた。

そして今、零のいる第二十八駆逐隊は所属している横須賀鎮守府からラバウル航空隊基地に天皇陛下が乗艦している戦艦『長門』を護衛しながら太平洋を航海していた。

何も起こらないことで暇をもて余していた零は、側にいた副艦長の高瀬新輝（たかせしんき）大尉に話しかけた。

「なあ、副長」

「何ですか、夜月艦長」

「いやさ、何も起こらないな〜って思つてさ」

「ですね。けどだからこそ気を引き締めなければいけませんよ？艦長？」

零は気楽にしようと思つて言つたことばを高瀬大尉に正論を返されてガツクリと肩を落とした。

「だいたい天皇陛下の護衛なんですからね」

「と言うかなんで今時になつてラバウルに天皇陛下が行くんだ？」

零の質問に高瀬大尉は悩みながらも答えた。

「ラバウルの士気を上げるためらしいですよ～」

それを聞いて直ぐに秉の脳内に雷が走った。

「対潜ソナー感度最大！ 探知初め！！」

「か、艦長?!」

急な指事に驚いていた高瀬大尉を横に通信要員から

「対潜ソナーに反応!! 数6！ 深度57m 地点から速度25ノットで左舷より接近中!!」

と報告が上がったのだつた。

第二話 第二十八駆逐隊の戦い

報告が上がるに直ぐに零は指揮を取り出した。

「總員！第一種戦闘配置！対潜水艦戦闘用意！」

「各艦にモールス打電！『我、敵潜水艦隊発見セリ！速度二十五ノットデ左舷ヨリ我ガ艦隊に接近中』」

零の号令と共に各乗組員が持ち場に着いた。そこで零は通信要員にまた新たな指事を出した。

「戦艦長門に敵艦接近の打電を打て」

それを聞いた通信要員はなぜ戦艦に？と言いたそうな顔で零をみた。それに気がついた零はその通信要員に怒鳴った。

「バカかお前は!! 戰艦長門には対潜ソナーがないんだよ!! さつさとしろー！」

「は、はい!!」

零の怒声にビビりながらも長門に打電を打つた。

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■

あれから数分後、やはり零率いる第二十八駆逐隊が敵潜水艦隊と遭遇した。しかし戦

いはこちらが有利に進んでいった。何故なら海戦が始まつてすぐに零が艦隊全艦に

『ハチノカリ』

と打電していたからだつた。この暗号文は第二十八駆逐隊流の戦術でその戦術とは各艦ごとにジグザグに動き網を描くように爆雷を投下するとゆうものだつた。そして、敵潜水艦6隻の4隻目を撃沈した時にまた敵潜水艦の接近を感じた時と同じ稻妻が頭に落ちた。それとほぼ同時に通信要員から報告が上がる。

「長門の左舷に敵潜水艦の接近を確認!!」

それを聞いた零はしまつた！と一瞬焦つたが、直ぐに冷静さを取り戻し、艦の指揮を取る。

「面舵一杯!! 180度完全回頭を確認の後機関最大！長門の横に滑り込め！」

それを聞いた高瀬大尉は驚きを隠せないまま零の指揮のもと回頭する艦の艦橋で詰め寄つた。

「艦長!! 何をしてるんですか!!」

「本艦隊の任務は天皇陛下が乗艦されている戦艦長門の護衛だ。敵の魚雷を受けてでも守るんだよ」

それを聞いて放心状態の高瀬大尉をよそに零は通信要員に指事を出す。

「第二十八駆逐隊全艦に打電！『我、長門付近ニ敵潜水艦ヲ発見ス。本艦は長門ノ護衛ニ

入ル、至急敵潜水艦ニ網ノ繩ヲ実行セヨ!」

それが打電し終わると、島風の艦橋から長門の中央部、弾薬庫付近に向かつて長門の左舷200m付近から三数本の魚雷が向かうのが見えた。零はヤバイ!と感じると更に無茶な指事をした。

「機関最大!全速力で長門の横に滑り込んで艦を盾にして長門を守るぞ!」

それを聞いた操舵者の伊川三治(いかわ さんじ)曹長が零に意見した。

「艦長!それではこの艦から多大な犠牲が出ます!」

それを聞いた零はそうかもしけないと考え直し、新たに指揮を出した。

「ならば駆逐隊朝潮に救助を頼め!それから総員退艦!」

そして総員退艦という言葉を聞いて放心状態から回復した高瀬大尉が質問してきた。

「艦長!それでは艦を動かす者が居なくなりますよ!」

「私がいる。なあくに、艦は動かせるしいざとなれば海に飛び込んで退艦するさ!」

それを聞いて高瀬大尉は渋々ながら引き下がつてくれた。それから全員が最大戦速で進んでいた島風に朝潮が横付けし、退艦すると零は艦の舵を自ら握り、長門の横つ腹に滑り込んだ。

すると直ぐに島風の左舷に三本魚雷が命中した。そして島風は魚雷が命中した左舷に大きく傾き、転覆してしまったのだつた。そしてその数秒後、艦中央部から真っ二つ

に折れて沈んでいった。



これはあの海戦の後の話だが、零は零の捜索に来た駆逐艦夕暮に回収されたらしい。そして敵潜水艦はというと長門の攻撃を自分の艦を盾にして守った島風に恐怖を感じ、島風の沈没後直ぐに撤退していった。

第三話 昇格と戦艦土佐

あの海戦の数週間後、連合艦隊司令長官山本五十六大将の執務室に呼び出しをくら
い、駆逐艦夕暮で休息をとつていた零は横須賀鎮守府の執務室に向かっていると、鎮守
府の港に未完成の戦艦が一隻停泊しているのを見つけ、執務室に案内してもらつていた
花和木曹長に質問した。

「なあ、あの戦艦はなんなんだ？」

「はっ、あの戦艦は加賀型戦艦二番艦の土佐ですね」

「土佐、か」

「戦艦はもう時代遅れらしく、未完成で放棄されることが決まつて置いてるだけみたい
です」

「さつ！ そんなことより、早く行きますよ！」

「ん、わかつたよ」

そう言われた零は曹長に案内されて執務室に向かつた。



そして執務室前に付いた零は扉を叩き、入室の許可を取つた。

トントン

『入れ』

零は司令長官の返事を聞いてから執務室に入ると自分の所属と名前、階級を大声で言つた。

「第二十八駆逐隊艦隊司令！夜月零少佐！只今出頭いたしました！」

執務室に入ると山本五十六連合艦隊司令長官が椅子に座るように勧めてきた。しかしそれを零は拒み、立つたままで居ることを選んだ。

「まあ少佐、座つてわどうかね」

「いえ、自分はこのままで結構です」

山本長官は少しため息をつきつつも話し出した。

「実はだね、天皇陛下から君に大勲位菊花章頸飾の授与と大佐に昇格するように通達が入つた。君の行動を評価した結果らしい」

「は、はあ」

「それから天皇陛下から君の願いを何でも一つ聞くように言われている。どうするかね」

そう山本長官に言われた零は、執務室に来るまでに見つけていた未完成で放棄されたいた戦艦土佐を思い出した。

「…なら、未完成で放棄されている戦艦土佐をいただけませんか?」

「土佐を?」

山本長官は零が何故土佐を要求したかが分からずに聞き返した。

「自分が前に戦艦加賀を見たときに思い浮かんだ改修を施したいのです」

「しかし資金や資材は回せないからな」

「大丈夫であります。自分には資金の宛がありますから」

そう零が言い切ったのを聞いた山本長官は、ついに許可を下ろしてくれた。

「…わかった。ならない」

「それと長官、土佐を改修した後は自分の乗艦としたいと考えています。故に改修が完了したら人員を回してくれませんか?」

それを聞いた山本長官は、少し悩んだような顔でしたが、直ぐに零の方を向き、返事をした。

「うむ、わかった」

「ありがとうございます」

そう言うと零は山本長官に一礼を済まし、執務室を退出した。



その後、零は知り合いの造船所に土佐を搬入し、改修工事を開始した。そして改修の

資材は零の創造能力、《物を作る程度の能力》を使い、出された物を使うことで賄うことには決まつたのだつた。

第四話 航空戦艦土佐 出撃！ミッドウェー！

零が大佐に昇格してから1年後、太平洋をミッドウェー島に向けて向かう大艦隊があつた。その艦隊の名を旭日艦隊、世界の邪を光持ち晴らすという意味の込められた艦隊である。アメリカの要所、ミッドウェー島攻略を目的とし、装甲戦艦空母1隻、戦艦2隻、航空空母3隻、重巡洋艦3隻、軽巡洋艦5隻、駆逐艦9隻、潜水艦5隻を含む大艦隊である。

そして、旭日艦隊旗艦、航空戦艦土佐。この艦こそ、零が作り出した最強の戦闘艦である。全長：234.09m、最大幅：71.5m、排水量は34.000t。この艦こそ、零が作り出した最強の戦闘艦である。

「遂に僕も連合艦隊司令かあ！」

旭日艦隊旗艦、航空戦艦土佐の第一艦橋で、零が呟いた。するとそれを聞き付けた副艦長になつた伊川偲（いかわ さい）中佐が零に質問をしてきた。

「そう言えば艦長は前はどの艦に乗つていたんですか？」

「ん？ 僕は第二十八駆逐隊の司令と島風艦長をしてたけど？」

零の前の所属を聞いた伊川副艦長を含んだ艦橋要員全員が驚き、叫びを上げた。

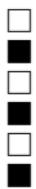
ビクツ！な、なんだ？！

「か、艦長があの対潜の鬼イ々！」

「本当にかよ」

と艦橋要員が日々に騒いでいた。

「そうだ！ 騒がしいぞ！ バカもんがツ!!」



そうしたほのぼのとした時間が流れていき、数時間後、旭日艦隊はミッドウェー艦隊と会敵していた。

「電探に敵航空機の大編隊！高度1500フィートで28キロで接近中!!」

通信要員から報告が上がる。それを聞いた零は、艦の指揮を執り出した。

「よし、全艦隊に敵航空機の接近を通達しろ」

「全艦第一種戦闘配置！航空隊全機発艦!!」

零がそう指事を出して数分後、土佐、航空空母『赤城』『加賀』『信濃』から総勢30機の航空機がミッドウェー艦隊に向けて飛び立つていった。それを見届けると、零は依然接近中の航空を撃ち落とす指揮を執った。

「全艦隊に通達！本艦隊に接近中の航空機に向けて主砲回頭！各砲身に乙弾装填!!二式誘導噴進弾!!撃ちイヽ方初め!!」

その号令と共に土佐を含む総勢12隻が一齊に主砲を発射し敵航空隊に向かつて飛んでいき敵航空隊の中心で起爆し、多数の敵航空機が落ちたのが確認できた。

「敵航空隊に直撃!!」

そして第二波も敵航空隊に吸い込まれるように進んでいき、のこりの敵航空機の大半を撃破していた。それを確認すると零は艦長席を立ち上がり、手を前に突き出すと高らかに指事を出す。

「これで敵の航空機の大半を落とした！　畳み掛けるぞ!! 全艦！ 最大戦速!!」

その指揮と共に旭日艦隊の全艦がミッドウェー艦隊に向けて進んで行つた。

第五話 レイテ島に単艦で出撃だとオオ!!!!

あの後、ミッドウェー海戦で日本海軍大艦隊『旭日艦隊』は大きな被害を被る事なく航空母艦『エンタープライズ』『ヨークタウン』『ホーネット』、重巡洋艦『ミネアポリス』『ニューオーリンズ』、駆逐艦『ハムマン』の敵艦計6隻撃沈という大打撃を敵に与えていた。

そして…

ミッドウェーを勝利に導いた戦いの英雄こと夜月雲はなど…

「はあ～暇だ：」

占領したミッドウェー島の港で停泊中の航空戦艦土佐の艦長室で暇をもて余していた。

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■

実はあの海戦の後零は大本営から休息を取るように言われていたのだった。時は遡ること6日前：

珍しく艦橋の電話がなり、零がそれを取つた。

「はい、航空戦艦土佐艦長、夜月大佐であります」

『こちらは大本営所属の神賀重鱸（しんが じゅうろ）大将だ』
（!!大将オ～！）

「はっ！神賀大将、どういたしましたか」

零はなぜ大本営の大将が出てくるのか不思議に思い、聞き返した。

『いやね、君に昇格の指事が出たのだよ』

「昇格？自分が：ですか？」

『そうだ。階級は少将だそうだ』

『そうだそうだ。2ヶ月後に君の航空戦艦土佐単艦で任務に当たつてもらいたいから1週間の休暇を与える。無論、土佐所属の全員だぞ』

「は、はあ。してその任務とは：」

嫌な予感がして聞き返した零の勘は嫌味にも当たつてしまつた。

『レイテ島奪還作戦だ』

『旭日艦隊の他の艦は大和型戦艦一番艦大和を旗艦とした聯合艦隊を組織し、敵本土に本土決戦を仕掛ける。その為に敵の艦隊の巨大海軍基地であるレイテ島に攻撃を仕掛け、敵艦隊を足止めしてほしいのだよ』

零はマジかーとも思いつつこの作戦を了承した。

「はっ！了解いたしました！装甲航空戦艦土佐！敵の大艦隊を叩き潰して見せましょ

!!

『うむ、任せたぞ』

神賀大将がそう言うと通信が切れた。



これが零が艦長室で暇をもて余している理由だつた。

あれから6日間零は次の戦いの前に何かしようとしたが何も見つからなかつた：いや、見つけられなかつたのだ。戦つている内は終わつたら何をしようという事が分かるがいざとなると分からぬのだ。

「…明日か」

零はカレンダーを見てふと呟いた。明日は敵の最大の要所に単艦で突撃する日だつた。そして、零はそつと目を閉じて思い出に浸つた。

すると流れてくるのは兵学校でお世話になつた世川教官、同期で先に戦死した西榎良介（にしろ りょうすけ）中佐、戦隊を率いていた綺誌璃衣（あやし るい）大佐、全て零の思い出の中の人物である。自分が死ぬかも知れないという不安感を払うと、零は暫くして目を開くと決心したかのように一人艦長室で呟いた。

「…よし」

「明日は必ず勝つてやる!!」

第六話 激戦！レイテ沖大海戦!!

敵艦隊基地に突入する前、零は艦長席の横に付けられている受話器を持ち艦内に通信を入れた。

「本艦はこれより敵艦隊基地に攻撃を仕掛ける」

「本艦の目的は敵艦隊をアメリカ本土に向かう事のそしだ！敵艦隊との戦力差は誰が見ても明らかである。しかし！私は諸君が一騎当千の強者だと思っている！我々が全力を出せば必ず勝てる！諸君らの奮戦に期待する!!」

零はそう言うと受話器を置き、息を整えると指揮を取り出した。

「第一種戦闘用意!!航空隊全機発艦!!」

零がそう指事を出して数分後、土佐から63機もの機体が飛び立つていった。それを見届けた零は次の指揮を執った。

「各砲身！並びに垂直発射管装填！撃ちいく方初め!!」

「よし！一気に畳み掛けるぞ！最大戦速!!」

零の指揮と共に土佐はレイテ島海軍基地に突撃していった。



そして…

その数時間後、

敵駆逐艦からの雷撃が土佐に向けて放たれた。

「左舷より魚雷！・数4！」

それを発見した艦橋要員が報告をあげる。

「取り舵一杯!!」

雲がそう叫び、舵が切られたが回頭速度が間に合わず魚雷が命中して艦が左に30度程傾いた。そして、次々に被害報告が入つて来た。

「魚雷、左舷に命中！ 左舷機関室浸水！」

「機関出力低下！」

「艦、傾斜左30度！」

そして、被害報告が一段落する前に次の指事を出した。

「浸水部所ハツチ閉鎖！」

「右舷、バラストタンク注水！ 傾斜復旧急げ！」

「各砲塔照準!! 撃てエエ!!」

そして艦の傾きがやつと直つたとおもつたのもつかの間。すぐに後方から衝撃が来た。

「後方格納庫に被弾！…グツ！格納庫要員総員戦死！」

「右舷バラストタンク満水！浸水、さらに拡大！」

後方の格納庫にいた乗員の戦死が報告される。それと同時に右舷バラストタンクの満水が報告され、艦の傾斜がまた広がりだす。そしてまた魚雷が接近して來た。

「右舷より魚雷！数3！」

「取り舵一杯！」

副艦長が指事を出した。しかし、それを切り壊して零が別の指揮を出した。

「いや！進路そのまま！魚雷を右舷にぶつけて傾斜を戻す！」

しばらくすると魚雷が右舷に命中した。すると命中したところから浸水が始まりました！

「右舷中央部に魚雷命中！浸水始まりました！」

「傾斜30度！」

「なっ！…傾斜もとに戻りません！なおも拡大！」

艦橋要員の観測係が声をあげた。右舷からの浸水が左舷の浸水に及ばずに左舷に傾き出したのだ。

「傾斜復旧の見込み…クツ…ありません！」

「傾斜復旧見込み無し！」

すると艦橋要員の残念がつた声が聞こえだした。そして零は艦長席から立ち上がる

と艦橋を見回し、口を開いた。

「全乗組員が一生懸命努力したが、この通り本艦は飛行甲板や主砲が使用不能にまでやられてしまった。しかし、米軍の足止めはできたのだ」

「諸君らの奮戦に感謝する…総員退艦!!」

雲がそう言うと乗組員達は敬礼をし、急いで退艦をしていった。その中で一人、観測係の更識修司（なかむら　しゅうじ）少尉が質問をぶつけてきた。

「艦長！」

「早く貴様も退艦しろ！」

「艦長は…どうするのですか」

「…俺は…この艦に残る」

私は言ひどよみながら答えた。

「いいんだ。私はこの艦と死にたいのさ…帝国海軍の一軍人として、この艦の艦長としてな」

「だから！貴様は生きろ！生きて、死んで行つたこの艦の…土佐の…帝国軍人達の存在した意味を見出だしてこい!!」

雲がそう言うと更識少尉は、敬礼をし、雲の遺品を求めてきた。

「はっ!!なら…、なら何か遺品になるものを下さい」

「そう言われた零は腰のホルダーから拳銃を抜いて更識少尉に渡した。
「ほら、くれてやるから早く退艦しろ！」

更識少尉は拳銃を受けとると急いで退艦していった。更識少尉が艦から飛び降りて退艦するのを見届けた零は舵を握り、敵艦に進路を執った。

そして艦長席に座り、敵戦艦に突撃する瞬間一人呟いた。

「…日本は…勝つたな」

そう言つて私は目を瞑る、それと同時に足元の床が張り裂け艦橋が爆発した。敵戦艦の中央部に見事突撃し、敵戦艦を道連れに沈んだのだつた。

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

その後の調査で土佐は戦艦4隻、航空母艦5隻、重巡洋艦11隻、軽巡洋艦13隻、駆逐艦78隻撃沈という大戦果を納めていた事がわかつた。そして、肝心の聯合艦隊は見事本土攻撃を成功させ、その一ヶ月後に大東亜戦争は日本側の三国同盟軍が連合国に勝利する形で終結を迎えた。

ハイスクールフリート編 設定（仮）

土佐型航空戦艦 土佐

基本排水量：34,000t

満水排水量：41,532t

全長：234.09m

最大幅：96.5m

吃水：9.8m

ボイラーボイラー：口号艦本式缶（空気余熱器付）8基

主機：艦本式タービン（高中低压）4基

出力：170,000馬力

速力：29.6ノット

乗員：2,089名

着艦識別文字：ト

武装

45口径46cm二連装砲4基8門

40口径12.7cm二連装高角砲25基50門

50口径14cm单装砲8基

垂直発射装置27基

25mm3連装機銃16基

25mm单装機銃19基

零式艦上戦闘機22型：27機

零式艦上戦闘機62型：16機

彗星三三戊型／D4Y3-S：11機

艦上攻撃機流星改：14機

レーダー

21号電探2基

13号電探1基

搭載艇

12m内火艇3隻

12m内火ランチ3隻

8m内火ランチ1隻

9mカツタ－3隻

13m特型運貨船2隻

解説

主人公が建造中止で放置されていた加賀型戦艦二番艦『土佐』に目を付け、天皇陛下から頂いて自力で完成まで持ち込んだ軍艦。あくまで主人公の軍艦ではあるが、大日本帝国海軍に所属している。艦の左右に航空甲板を装備している。主人公以外の人間はハイスクールフリート編時は居らず、他の乗組員は全員妖精である。また主人公はこの艦のメンタルモデルとなっている。

この艦は零が前世から記憶にあつた戦艦大和が魚雷によつて沈んだことを考慮して装甲を厚くし、戦艦の主砲、副砲、艦橋、煙突を残して航空甲板を装備した軍艦

－艦載機－

零式艦上戦闘機22型

全幅：12.00m

全長：9.060m

全高：3.570m

最大速度：時速541km

エンジン：「栄」21型（1,130馬力）

武装：7.7mm機銃×2 20mm機関砲×2

零式艦上戦闘機62型 A6M7

全幅：11m

全長：9.121m

全高：3.57m

最高速度：時速543km

エンジン：中島「栄」三一甲型空冷複列星型14気筒

（1,130馬力）

武装：

20mm機銃2挺

13mm機銃3挺

胴体下に250kg爆弾または500kg爆弾1発

主翼下に60kg爆弾2発または30kg三号爆弾4発

彗星三三戊型／D4Y3—S

全幅 11.50m

全長 10.22m

全高 3.74m

エンジン：三菱「金星62型」（1,560馬力）

最高速度：時速574km

武装：

7.7mm機銃×2

7.9mm旋回銃

500kg爆弾×1または翼下250kg爆弾×2

艦上戦闘機流星改

全長：11.49m

全幅：14.40m

全高：4.07m

エンジン：中島「誉」12型（1,670×1,825）

最大速度：時速543km

武装：

20mm機銃×2

魚雷800kg×1

800kg爆弾×1または250kg爆弾×2または60kg爆弾×6

第二十八駆逐隊

島風型駆逐艦一番艦 島風

初春型駆逐艦三番艦 若葉

初春型駆逐艦五番艦 夕暮

朝潮型駆逐艦一一番艦 朝潮

朝潮型駆逐艦六番艦 山雲

土佐型装甲戦艦空母一番艦 土佐

戦艦

長門型戦艦三番艦 尾張

大和型戦艦四番艦 紀伊

航空母艦

信濃型航空母艦一番艦 信濃

赤城型航空母艦一番艦 赤城

加賀型航空母艦一番艦 加賀

重巡洋艦

高雄型重巡洋艦三番艦 摩耶

利根型航空巡洋艦一番艦 利根

最上型航空巡洋艦一番艦 最上

軽巡洋艦

球磨型軽巡洋艦一番艦 球磨

球磨型軽巡洋艦二番艦 多摩

川内型軽巡洋艦一番艦 川内

川内型軽巡洋艦二番艦 神通

夕張型軽巡洋艦一番艦 夕張
駆逐艦

初春型駆逐艦三番艦 若葉

初春型駆逐艦五番艦 夕暮

朝潮型駆逐艦一番艦 朝潮

朝潮型駆逐艦六番艦 山雲

暁型駆逐艦一番艦 暁

暁型駆逐艦二番艦 韶

秋月型駆逐艦一番艦 秋月

秋月型駆逐艦八番艦 冬月

秋月型駆逐艦十番艦 宵月

潜水艦

伊四〇〇号潜水艦

伊四〇一号潜水艦

伊四〇二号潜水艦

伊五八号潜水艦

伊八号潜水艦

主人公

矢矧長門→夜月零（やづき しづく）

年齢：19歳

性別：男

身長：169cm

体重：51kg

最終階級：少将 死後二階級特進大將

服装：第一種軍装、第二種軍装

解説

女神に間違つて殺され、ハイスクールフリートの世界に転生させられるはずがまたもや女神のミスで第二次世界大戦前の大日本帝国に転生した。そして、主人公が戦死したことをお期に、ハイスクールフリートの世界に性転換して16歳の姿で新たに転生した。体の中にユニオンコアを持っているが人間と同じとされる。航空戦艦土佐の艦長でメンタルモデル。

性転換後

年齢：16歳

性別：女

身長：159cm

体重：46kg

スリーサイズ：胸围90cm、腰围65cm、股围85cm

外観

見た目は霧の超戦艦ムサシとイオナを足した感じ。

第七話 転移と航空戦艦土佐

「…ん？…こは…」

零が目を覚ますとそこは零が戦死したはずの土佐の第一艦橋だつた。そして零は艦橋を見回している内に体に何か違和感を感じ、自分の体に問題が無いか確認し出してすぐりに叫んだ。

「なんで私が女になつてゐるのツ!!」

そして、大日本帝国の士官服一人の小人の妖精が現れ、喋りかけてきた。

「夜月艦長お久しぶりです。自分が誰かお分かりですか」

「ん？…お前、伊川偲か？」

零は恐る恐る土佐の副艦長の名前を言つた。

「そうですよ、現世で死んだら人達は何故か妖精みたいなのになつてこの艦に來てるんですよ」

そして零は自分自身の事に付いて聞いた。

「私はどうなつてしまつたんだ？」

「艦長は…」

この艦のメンタルモデルになられました。その為にこの艦には艦長以外の人は居ません。他の人員は全員妖精です」

「な、何だと!」

それを聞いた雲はすぐに艦長席から立ち上がり大声を上げた。雲は艦を運営するためには最低限必要な人数は居るものだと思っていたのだ。しかし、艦の乗組員は航空隊等の要員も全員が前世で死んだ後妖精としてここに来ていた。それから雲は艦長席に再び座ると土佐の現在位置を副艦長に聞いた。

「副艦長、本艦の現在位置は」

「はつ、レーダーにて観測したところ本艦の現在位置は北緯33度5分、東経139度48分、八丈島200kmの海域です」

「そうか：わかつた」

そう言うと零は黙り込んだ。そして零自身がこの艦のメンタルモデルになつていてる事を把握してからしばらくすると観測係から報告が上がつた。

「艦長！レーダーにて本艦に前方より接近する艦隊があります！距離2000km！」

「…接近する艦隊、だと？」

観測係からその内容を聞いた零は艦の指揮を執り出した。

「総員戦闘準備！各砲塔に砲弾装填、但し、砲塔は何時でも回頭出来るようにしておけ、

それから偵察部隊の川木小隊を出すぞ！対潜・対水上戦闘用意ッ！」

「了解、総員戦闘配置！対潜・対水上戦闘用意！偵察機川木小隊発艦！」

副艦長の指揮と共に先程まで和やかだった艦の空気は一転した。それから数分後：「所属不明艦隊！進路変更確認出来ず、本艦に向け依然接近中！」

それを聞いた零はソナーを覗き込み潜水艦の存在を確認した。

「水上艦のみか：よし、対潜戦闘用意解除、対水上戦闘のみに戻せ」

「対潜戦闘準備を解除！」

そして零は観測係に所属不明艦隊が射程に入るまでの時間を聞いた。

「所属不明艦隊が本艦の射程圏内に入るのは後何分後だ？」

「あと3分ちょっとで所です」

射程圏内に入るまでの時間を聞いてすぐに偵察に出でていた川木小隊から通信が入つた。

『川木小隊ヨリ土佐。敵艦種、陽炎型駆逐艦三隻、長良型軽巡洋艦数隻ヲ含ム水雷戦隊ト判明セリ』

『ソシテ敵艦隊旗艦ニハ、長門級戦艦ト思ワレル存在ヲ確認セリ』

第八話 天城型巡洋戦艦

『ソシテ敵艦隊旗艦ニハ、"長門級戦艦"ト思ワレル存在ヲ確認セリ』
川木小隊の打電内容にあつた『長門級戦艦』という言葉を聞いてすぐに顔を上げ、通信係に再度確認した。

「…なに？長門型戦艦と言つてきているのか？」

「はい、確かに長門級戦艦と打電が来てます」

通信係の返答を聞くと今度は副艦長に話しかけた。

「なあ、副艦長」

「何ですか、夜月艦長」

「お前に長門型戦艦に長良型軽巡、陽炎型駆逐艦を含んだ艦隊を知つてゐるか？…てか居たつけ？そんな艦隊。アレ？俺か？俺がおかしいのか?!」

「大丈夫ですよ。私も知りませんから、艦長は至つて正常ですよ」

副艦長に正常と言われた零は安心し、また再び話し出した。

「な、ならないんだ。…少々取り乱した」

「しかし、ビックセブンの一角か…」

少しばかり考えた後零は艦の指揮を執り出した。

「両舷前進原速、黒15！」

「両舷前進原速、黒15！」

零はそう指事を出してからしばらくしてレーダ観測員から報告が上がった。敵艦隊が本艦の射程に入つたというものだつた。

「艦長！ 所属不明艦隊本艦の射程圏内に入りました」

聞いてからすぐに零は副艦長にあることの確認を取つた。

「副艦長、各航空隊の発艦準備はどうだ？」

「はっ！ 全航空隊発艦準備完了！ 二分あれば全機出せます！ 各砲塔、並びに垂直発射管全管装填完了済みです！」

航空隊の情報を聞いた零は喜びを露にした。

「パアーフエクトだ」

そう言つてから零は攻撃の指揮を執ろうと指示を出そうとした。しかし、それは通信係からの報告で遮られた。

「よし！ 全砲 t 「艦長！」 ……どうした！」

「所属不明艦隊より打電！ 『こちら海上安全整備局ブルーマーメイド所属の天城型巡洋戦艦『天城』である。貴艦の所属、目的を明らかにし、速やかに武装解除し停船せよ。指

示に従わない場合は法律に則り、貴艦隊を攻撃す』とのことです」

それを聞いた零はしばらく黙り込んでから次の指揮を出した。

（あれは未完艦の筈では：）

「仕方ない、天城に打電だ。乗員の生存権の確約を認めるならば貴艦の指示に従うと伝える」

「両舷機関停止！」

「両舷機関停止！」

そう零が指示してから数分後、艦が停止するとすぐに通信員から報告が上がった。天城から返答があつたのだ。

「艦長！ 天城より打電來ました！『貴艦の要求を承認し、貴艦乗員の生存権を確約する。また、本艦内にて貴艦の決定権の有する人物との会談を希望す、海上安全整備局 一等監察官 宗谷真霜』です」

そして零は通信員に新たな指示をだした。

「天城に打電だ『貴艦ノ要求ヲ承認ス』とな」

そしてから零は副艦長に話しかけた。

「副艦長、一緒に来てもらえるか」

「はっ！ わかりました。しかし艦を指揮するものが居ませんよ？」

副艦長にそう指摘された零は砲雷長に艦長代理を任せ、艦の横に接岸してきた天城に乗り込んだ。

第九話 説明と交渉

巡洋戦艦天城に乗り込んだ一夏と伊川副艦長が案内されたのは天城の長官室に案内された。そして二人が長官室に入るとそこには一人の女性士官のような人物が居た。その存在を確認すると二人は敬礼をし、自分の所属を話した。

「自分は大日本帝国海軍『旭日艦隊』旗艦、土佐型航空戦艦一番艦土佐艦長並びに『旭日艦隊』司令長官の織斑一夏少将です」

「土佐型航空戦艦一番艦土佐副艦長の伊川偲中佐です」

一夏達の自己紹介を聞いた女性も敬礼をし、自分の名前と所属を話した。

「私は海上安全整備局安全監督室情報調査隊所属、宗谷真霜一等保安監督官です」

「巡洋戦艦天城艦長の宗谷真冬二等保安監督官です」

そして、四人が椅子に座るとは真霜は一夏達に質問をしてきた。

「さて、もう一度確認しますが貴艦の所属はどこですか？」

「本艦の所属は大日本帝国海軍、横須賀鎮守府です」

一夏ははつきりと自分の所属を再び話した。そしてその答えに帰ってきたのは驚きの言葉だつた。

「しかし今、横須賀鎮守府という所はアメリカとの共同軍事施設で名前も横須賀軍事基地になっていますよ?」

それを聞いた一夏はすぐに立ち上がり大声で叫んだ。

「何だと!! アメリカにだと!! 日本はアメリカ戦争で負けたのか!!」

「え? アメリカとなんか戦争なんてしてませんよ?」

「何? 戦争が起きていないだと?」

「ええ、最後の戦争は日露戦争の時ね」

それから一夏は自分がこの海域に現れるまでの経緯を話した。

「…」

「…」

そして黙り込んでしまった一夏と伊川副艦長に真霜が何でアメリカに過剰に反応をしたのかを聞いた。

「何故織斑少将はアメリカにそこまで険悪なんです?」

「…私の戦友、教官、親しかつた人を皆アメリカに殺されたんだよ」

「!!、それは済まないことを聞いたな」

「いや別にいいさ、嘆いたところでなにも変わらないですよ」

一夏がそう返してすぐに机に備え付けられていた電話が鳴った。

「はい、宗谷真霜です。はい…はい、織斑少将は…はい…了解しました」

「そう言い電話を切った真霜は一夏の方を向いて一夏達の今後の待遇を話した。

「貴官は今後、ブルーマーメイド保安監察部所属として階級は少将とすることが決定し

ました。よろしいですか？」

「ええ、問題ありません」

「それから織斑少将、ご年齢はおいくつで？」

「19と言いたい所ですが今は16歳ですね」

一夏の年齢を聞いた真霜は成る程と言い再び話し出した。

「なら織斑少将。ブルーマーメイド横須賀女子学園に生徒兼職員として入学してみませ
んか。勿論乗艦は扶城のままで構いませんよ」

一夏はその提案に面白そらだと乗ることにした。

「いいですね。そうしましようか。だけど本艦の武装は解析は許可しませんからね」

「別に構いませんよ」

しばらくしてから一夏は艦に戻り天城に引率されながら横須賀に向かつた。

第十話 ブルーマーメイド横須賀女子学園

—ブルーマーメイド横須賀女子学園—

あれから二ヶ月後、零はブルーマーメイド横須賀女子学園にましろと明乃と出会い、学園に向かっていた。

「そう言えば貴女の名前は？」

唐突に明乃が質問してきた。

「確かに聞いてないね」

「あれ？ 言つてなかつたか？」

「私の名前は夜月零つて言うんだ。二人と同じくブルーマーメイド横須賀女子学園の新入生だよ」

零の名前を聞いたから零は顔を向き合わせ声を上げた。

「私達と同じなんだ！（ね！）」

それを聞いたから零は時計を指差しながら忠告した。

「それよりも急がなきや遅刻だよ？お二人さん」ツンツン

「ん？」

「遅刻するウ～!!」

「さて、行きますか」

そう言うと零は急いで走り出した二人を追いかけて行つた。（ホバー移動）

□ ■ □ □ ■ □ □ ■ □

ーブルーマーメイド 横須賀女子学園ー

あれから零達は学園に着くとクラス発表を見に行つた。

「え～っと、私は晴風クラスの～、やつた！艦長だよミケちゃんはどうだつたの？」

「私は晴風の副艦長だよ。零は？」

そう言つてしましろと明乃は零の文字があつた所の艦名を見て頭に疑問符を浮かべた。

「航空戦艦 土佐？艦長、夜月零？」

「零一人しか名前書いてないけど？」

それを聞いて零は軽く情報を教えた。

「それはさ、一人で動かす特殊な艦だからだよ～」

「なるほど～…つて！何で知ってるの!! 零?!」

あ、やべ、ミスつた。

「私がその艦を動かす為の処置を受けてるからかな」

「さつ！教室に行かなきゃ遅刻するかもよ～」

そう言われた二人は急いで教室に向かつた。しかし、零は職員室に向かつてから教室に大日本帝国海軍の第一種海軍軍服をブルーマーメイド用に変えた服を着て向かつた。

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

—教室—

「艦長！挨拶！」

零はそう言いながら教室に入つた。そして零に気がついた二人が立ち上がり叫んだ。

「ああ！零！」

「ん？ああ、私は晴風クラスの職員兼生徒なんだ」というより艦長！挨拶！」

そして大声で言われた明乃は驚きながら挨拶の指示を出した。

「は、はい！」

「き、起立！気をつけて！」

「礼！」

そう明乃が言うとクラス全員が挨拶をした。それを確認した零はこれから流れを話した。

「よし。私はこここの生徒兼職員のブルーマーメイド保安監察部所属の夜月零少将だよ」

「君達は今から駆逐艦晴風の乗員だ。君達はここで様々な事を学んで優秀なブルーマーメイドになつてくれ！」

「「「「「はい！」」」」

その返事を聞いた零は艦に行くように指示をした。

「なら全員晴風に乗り込んで海域P—03に09：00までに迎ってくれ」

「「「はい！」」」

そう言うと零とクラス全員は艦に向かつた。

第十一話 猿島の撃沈と晴風と

船のドックまで来ていると土佐の横に晴風が停泊していた。それを見た明乃やましろ達晴風クルー達は土佐を見て圧巻の意を表してきた。

「おお～！」

「これが土佐」

「大きい！」

それを聞くと雫は軽くこの艦の解説をした。

「この艦は排水量41,532t、全長234.09m、最大幅9.6.5m最高速度は28.5ノットまで出る」

「それに土佐は大和型と同じ口径の46センチ砲がついてるから攻撃力は抜群さ」

雫からの説明を聞くと晴風クルー達は驚きをあらわにしていたがそれに気がついた雫は早く艦に乗り込んで海域に向かうように指示をした。

「おお～！」

「そんなに驚いとるならさつさと艦に乗り込んで海域に向かえ!!」

「す、すいません!!」

「謝つてる暇があるなら早く艦に乗り込め!!」

「――「は、はい～!!」」

「――「は、はい～!!」」

□ ■ □ □ ■ □ □ ■ □ □ ■ □ □ ■ □

あれからしばらくたつて零達は演習の海域に到着していた。到着して直ぐに晴風へ教員艦である『さるしま』から砲撃を受けた。砲弾は見事に第三、第四主砲のあいだに命中した。それを見た零はさるしまに通信を開いた。

「古鳥二等保安監督!」この攻撃は何だ!!」

それに帰つて来たのは途切れ途切れの言葉だつた。

『敵は…ウツ…敵は…』

PTAウイルスがもう!!…仕方がないか…

それを聞いて直ぐに零はさるしまへの通信を閉じ、晴風を見た。そこには驚きとも言える映像が出ていた。晴風がさるしまから攻撃を受け転覆しかけていたのだ。それを見た零は尚も晴風に攻撃を加えようとしているさるしまへの攻撃を開始する事を決め、艦の指揮を執り始めた。

「全艦戦闘配置!!」

「全艦戦闘配置!!」

自分がそう言うと副艦長が指示を復唱した。すると艦に警報が流れた。そしてそのまま後ろに艦が揺れた。

「グツ！被害知らせ!!」

「後部甲板に直撃！しかし第一装甲板で食い止めました!!」

「よし！ならば第一主砲塔右旋回15度!!砲弾装填！装填弾は貫通弾だ」

そう言つてから零は艦長席の右斜め前の席に座つてゐる妖精に指示を出した。

「砲雷長、一撃で沈めてやれ」

「合点ですよ!!艦長!!」

そう言つと砲雷長は艦橋窓から双眼鏡を覗き込みながら砲の微調整をした。

「目標、速度二十ノット！主砲仰角プラス15！砲身間隔15センチ開けて散布面積広げろ！」

「撃てエエエ～！！！」

零がそう言つと主砲が火を噴き発射された砲弾は全弾さるしまの右舷に命中した。

そして、その事によりさるしまは片舷からの浸水がひどく、直ぐに転覆して沈んでしまった。それを見届けると零は晴風クルーの全員を助けてその海域から直ぐに離脱して行つた。

第十二話 土佐が反逆艦つてどういうことだ!!

さるしまを撃沈させて海域を離脱した数時間後、零の元に晴風クルーの意識が戻ったと知られた零は救護室に来ていた。

「川岸美紀中尉、目覚めたというのは本当か?」

「はい、皆元気ですよ。夜月艦長」

そう言うと救護室主任の川岸美紀（かわきし　みき）中尉はベットに横になつている晴風クルー達をさした。奇跡なのか晴風クルー全員が五体満足だったのであつた。

それを確認した零は明乃達に話しかけた。

「明乃、ましろ。大丈夫か?」

「うん、大丈夫」

「大丈夫だ」

「なら艦長室に来てくれ、現状を話す」

「わかつたよ!」

「わかりました」

二人の返事を聞いてから零は艦長の明乃と副艦長のましろを連れて航空戦艦土佐の

艦長室に向かった。

□ ■ □ □ ■ □ □ ■ □ □ ■ □ □ ■ □

雫は艦長室のソファーアに腰かけると一つ咳払いをした。

「今の現状は非常に悪い」

「? どういうこと?」

ましろが聞き返してきた。

かつた:」

「! そんな! 雫は守ってくれただけなのに!!」

明乃達が直ぐに立ち上がり、声を張り上げるが雫はそれを軽く鼻で笑うとソファーアから立ち上がった。

「私は元から信用は無いだろう……とにかく言えるのはあの艦には異常があつた。それだけだ」

雫のその言葉に視線を横にあつた棚に移した。するとましろはそこにあつた昔の写真に気づき手に取った。

「そんな……ん? このの写真は」

「かつこいい人だな」

「ああ、その写真に写っているのは私と私の教官だ」

雫がそう言うと明乃は大声を出して驚いていた。

「えっ！ 雫この写真に写ってるの男の人だよ！」

「雫は女の子なんじや…」

ましろのその眩きを聞き取ると雫は執務椅子に座ると事実を話した。

「それは私が『元々男だった』からね」

そして驚きで声も出ない二人を横目に話し出した。

「私は元々別世界の住人でね、向こうの大日本帝国海軍に居たんだ」

「一応連合艦隊司令長官で少将だつたんだよ？ あ、年は19だつたかな」

それを聞きさらに二人は固まつてしまつた。連合艦隊司令長官を19歳で歴任していたのだ。しかも少将で、だ。たぶん最年少将校ではないだろうか。仮にもこの世界にも連合艦隊はある。しかしその司令長官になる人間は大抵50～60代の人だけなのだ。しかし、二人はそれだけすごい人物が目の前にいることよりも気になることを質問してきた。

「…てつ！ それより何で女になつてるの！」

「んうそうだね、まず…」

そう言い雫は自分の帝国海軍入隊から事を話し出した。そして三人は数時間ほど話

し合っていたのだつた。

第十二話 土佐 対 アドミラルシユペー

「状況報告！」

時は午後2時半、艦長室で休んでいた所に敵艦捕捉の連絡をうけた零は第一艦橋に入つてすぐにそう叫んだ。

「敵艦種はアドミラルシユペーです！時速20ノットで接近中！距離3000！」
レーダー係が零の叫びに反応して報告する。

「全艦第一種戦闘配置！対水上戦用意！」

零がそう指示を出すと通信係は艦内に警報をかけ、指示を乗組員に伝える。

『全艦第一種戦闘配置！対水上戦用意!!』

そう艦に放送がかかって直ぐに艦橋にましろがやつて來た。

「零！これはいつたい！」

「アドミラルシユペー…敵だよ」

「そんな…」

ましろが言葉を失つたのを確認した零は部屋に帰るように伝えた。

「ましろ、部屋に戻つていってくれないかな？まだ傷はあると思う」

「…わかつた」

そう言うとましろは渋々と艦橋から降りていった。艦橋から居なくなつたのを確認した零は前のシユペーを見直すと艦の指揮を執り出した。

「航空機全機発艦ができる機体から出せ！」

「第一、第二主砲塔各主砲に通常弾装填！」

「てええー！！」

零が叫ぶと第一、第二主砲が火を吹いた。その砲弾は真っ直ぐに飛び、シユペーの右舷付近に着弾したするとシユペーは左舷に回頭を始め、シユペーの主砲がこちらを向いてきたのが確認できた。それを確認した零は回避をするように伝えた。

「ヤバイ!! 機関最大！ 面舵一杯！」

土佐は右舷に回頭を始めた、が、回頭が終わるより先にシユペーの主砲が火を吹き砲弾の内、2つが土佐に直撃した。

「グッ！ ひ、被害報告上げろ!!」

「左舷後部甲板、左舷後部に直撃！」

「第一装甲板で食い止めました！ 被害微小！」

艦の受けた被害が微少だったのを確認した零は更に指揮を執り出した。

「全砲塔九一式徹甲弾装填した後回頭90度！ ピツチ角—11度!!」

その指示を出して直ぐに砲雷長が意見を言う。

「艦長！ それでは敵艦に当たりません！」

「お前は何を言つてゐるか!!何のために九一式徹甲弾を装填させたと思つとるんだ!!」

そう激を飛ばすと砲雷長はびくつきながら敬礼をしてきた。

「は、はつ!! 装填はどうだ！ …わかつた。各主砲全砲塔回頭、並びに装填完了しました

!

それを聞いた零は手を前に突き出して指示を執る。

その瞬間主砲が火を吹き、艦が少しながら揺れた。そして土佐から発射された砲弾は全弾シユペーの右舷の喫水下に命中し、少し傾いた所に雷撃隊の放つた魚雷が命中してシユペーは右に大きく傾いた。それを確認した零は新たな指示を出した。

で、おけよ！」

そしてシユペーに乗り込んだ乗組員達は次々とシユペーの生徒達を確保していく、その数時間後には完全にシユペーを占領したのであつた。

第十四話 明乃との別れと戦地に向かう土佐

（アドミラル・シュペーと戦った数日後）

明乃 side

アドミラル・シュペーと零の土佐との戦闘が終わつた数日後。私達晴風クルーは零から受領したアドミラル・シュペーに乗艦していた。

「艦長、零は何故私達にシュペーを渡したんでしょうか？」

艦長席に座つていると横から副艦長を任せたましろが質問をしてきた。

「シロちゃん…」

「…わからないよ…だけど零には何かの考えがあるんじゃないかな」

私は少し言ひどよみがら答えた。それから零の乗つてゐる土佐が動き出したのが見えた。そして、私はリンちゃんにシュペーも土佐について出航の指示を出した。

「リンちゃん、シュペーも土佐に続きます。シュペー、機関始動、前進減速」

「機関室！機関始動！」

しかし、シュペーは進む事なく変わりに伝声管から機関長の叫び声が聞こえてきた。

『ダメだこれは！機関使用不能!!』

それが聞こえて直ぐに私は機関長に聞き返す。

「何があつたんです!」

『燃料が全部抜かれてる!』

えつ? 燃料が、抜かれている?

「なつ! 一体どうしてツ!!」

そう叫んだ次の瞬間、艦橋から土佐を見た私はシユペーを置き去りに進んでいく土佐を眺める事しかできなかつた。

明乃 side out

雫 side

「よかつたんです?」

艦長席で艦の前方を眺めていると副艦長が話しかけてきた。

「ん? 何が?」

「シユペーに晴風クルーを置いてきて」

そう言われた雫はまあ、大丈夫じやないか? 食料とかもあるしと答える。

「まつたく、貴方つて人は…というか、ついて来ない所を見るとシユペーの燃料まで抜きましたね?」

ギクッ!! 何故、バレた!?

「バレバレです」

そう言われた零は軽く肩を落とした。

「ま、まあ、燃料残して置いたら付いてくるじゃん」

「確かにあの人達なら来るかもしませんね」

確かにそうかもというようにポンと手を叩いた副艦長を見て零はあえて付け足しをした。

「これから土佐は武蔵を討伐に行くんだ、乗艦を一度沈没させられた明乃達は少なからずケガとかがある。そんな奴らを戦闘になんかは出せないでしょ」

「それに、ブルーマーメードの所にも明乃達を解放したって伝えてあるしな」

「これで土佐が悪者確定になりましたね」

「言うなよ、少しでも私達の正しい行動を知るものがいればいいさ」

零のそれを聞いた副艦長は軽く愚痴つたが、直ぐに立ち直り、零に一言言うように言つた。

「まつたく…では艦長、一言頼みますよ」

それを聞いた零は艦橋を見回すと手を前に突き出し、宣言した。

「この戦艦土佐の似合う戦場に行くぞ!!」

雲がそう言うと士気を上げた乗組員達の叫び声が艦内のあちこちから聞こえてきていた。

「――オオオオオオオオ!!!!」

第十五話 航空戦艦土佐の奮戦

明乃達のシュペーを置き去りにした翌日、零は武蔵との戦闘に入りかかろうとする土佐の第一艦橋にいた。

そこで海域に入ろうとする前に艦橋から武蔵と戦闘を繰り広げる東舞鶴男子海洋学園の教員艦が10数隻が見えた。そしてその内の6隻は大破し、沈みかけている状態にある事が分かると零は急ぎ教員艦に打電を打つよう命じた。

「なつ：東舞鶴男子海洋学園教員艦に打電『我、教育艦武蔵二対シ戦闘行動ヲ開始スル』だ」

それからものの二分で教員艦からモールスが帰つて来た。

「艦長！ 教員艦きりさめから打電！ 『貴艦ノ参戦、心ヨリ感謝スル』です」

それを聞くと零は艦の指揮を執り出した。

「全艦第一戦速。戦闘海域に突入する」

「対水上戦闘用意！」

「はっ、対水上戦闘用意！」

副艦長が復唱し、命令をだすと艦内に警報が鳴り響いた。

「主砲配置よし、各部配置よし、非常閉鎖よし、対水上戦闘用意よし！艦長！対水上戦闘用意完了しました！」

そして、副艦長は水上戦闘用意が完了したのを確認すると零に報告を上げた。そして、その後、艦橋に衝撃が走った。

「グツ、状況報告！」

「武藏！撃つてきました！第一航空甲板に被弾!!」

それを聞いた直ぐに零は被弾した第一航空甲板にあるものの存在を思いだし、航空甲板を向きながら叫んび、被弾箇所を切り離すように指示をする。この航空戦艦土佐には零が前世で知っていたミッドウェーでの赤城の悪夢を参考に切り離すことで被害を最小限に押さえることを目的として第一、第二航空甲板につけられていた。

「なに！甲板には魚雷を抱えた機体があるんだぞ！」

「急いで第一航空甲板！並びに左舷強化部を切り離せ!!」

「は、はい！」

そう言うと被弾した航空甲板とその補強パーツが切り離され、海に落ちると同時に被弾部は爆発したのだつた。

「第二雷撃隊全機発艦!!」

「それから全機発艦後、第二航空甲板！並びに右舷強化パーツを切り離せ！」

それから直ぐに零は第二航空甲板にあつた航空機を全て発艦させると第二航空甲板も切り離すように指示をし、戦闘に突入した。

あれから三十分後、零の土佐の被害が甚大になつて来ていた。

「第一、第三、第四主砲塔に被弾！」

「後部艦橋敵弾命中！」

「弾薬庫付近に着弾！火災、誘爆多発!!」

「消化班急がせろ!! 急いで被害を押さえ

!!」

艦橋に次々と被害報告が上がつてくる。そしてついに零は口を開いた。

「…第二主砲に乙弾装填。敵の攻撃能力を潰すぞ」

「なつ! 艦長！あの砲弾は！」

「わかっている……だが、被害が大きくなりすぎたんだ」

そして零はもう一度、指示を出した。

「第二主砲塔に乙弾装填！」

そう言うと乙弾が装填され、第二主砲塔が武藏を捉えた。

「撃てエエエエ!!」

雲はそう叫び、乙弾が放たれると土佐にも武蔵が放つた一発の砲弾が弾薬庫に命中した。

その後土佐は爆沈し、武蔵は戦闘能力を失われ、教員に生徒達が保護されたのだった。

インフィニット・ストラトス編

第十六話 神界再び

目が覚めると零は“また”白い空間に来ていた。一度転生するときに来ているので二度目になるのだ。そしてしばらくすると零は小さくため息をつき、飽き飽きしたような声でここに呼び出した人物を呼んだ。

「アテネ？いい加減出てきてくれない？」

「ハツハツハツ！前の時みたいに動搖してくれてもいいんだよ？」

笑いながら神様が現れた。いやさ、そんな毎回も動搖なんてしませんよ。

「ですよねー」

そりやそうだわ！

「で、用件はなんですか神様？」

「また間違えて殺っちゃた」

ん？聞き間違いかな？

「で、何ですつて？」

「また間違えて殺しちゃった☆」

—ブチツ—

何処からか何かが切れた音がした次の瞬間、雲はアテネの胸ぐらをつかみ怒鳴り込んだ。

「何が『また間違えて殺しちゃった☆』だ！ふざけどんのか！それに何度も何度も転生先間違えやがつて！それに性転換するつてなんだよ！頭かちわるぞワレ!!」（怒

「だって、間違えちゃつたんだもん…」

言い訳を言つたアテネを睨んで返す。

「ん？」ギロツ

「ひつ！ひイイイイ！」

～そして数十分後～

数十分叫び続けてから落ち着いたあとにアテネにこの後どうなるのかを改めて聞いた。

「で、俺はこの後どうなるんだ？」

「は、はい。ISの世界への転移準備が整いましたから…」

それから直ぐに零は頭に浮かんだ疑問をアテネにぶつけた。

「？だけど転移しただけなら資金とか戸籍とかの問題があるんじゃないのか？」
するとその質問に帰つて来たのは意外な言葉だつた。

「あー、それは大丈夫です。零さんは初め大日本帝国に転生する前に I S の世界に織斑千冬の弟で織斑一夏の兄の織斑零として生まれてますから」

「俺つて I S の世界に行つてたのか？だけどその時の記憶は無いぞ？」

零がそう言うと軽く説明をしてくれた。

「あれですね、原作にあつた誘拐事件で穴に落ちて第二次大戦の時代にその時の記憶消して飛ばしといたんです。というかよくよく言うと零さんがいた大日本帝国も I S 世界の第二次大戦の時代ですからね！」

「さ、さいですか…」

零がそう乾いた返事をするとアテネは何処からか取り出したハンマーで零を叩いた。

「そうだ、一応記憶戻しひときますね。えいっ！」

「ンッグッ…！」

すると次の瞬間、膨大な程の記憶が元に戻ってきた。その事で膝を一瞬ついたが、直ぐに立ち直り零はアテネに転生特典の話をしだした。

「なあ、間違つて転生させられてた訳だから転生特典を増やしてくれないか？増やしてくれないなら「別にいいですよ？」：今なんて？」

「別にいいですよ？特典増やしても。というか増やさないと私が怒鳴られますしあす

し」

それから一瞬放心した零だつたが直ぐに正気に戻り、新たな特典を言つた。

「な、なら専用のＩＳが欲しいですね。前世で書いてた手帳にあつたので」

「はいはい」

「俺はこれくらいですかね、あとは任せます」

零がそう言うと次の瞬間、床が急に抜けて零は穴に落ちて行つた。

「こんのクソつたのがアアアア!!」

設定

主人公

夜月零→織斑零

年齢：15歳

性別：男

身長：169.5cm

体重：51.2kg

最終階級：少将 戦死二階級特進 大將

服装：第一種軍装、第二種軍装

容姿：ほぼ艦これの鳳翔さん。

解説

女神に間違つて殺され、《インフィニット・ストラatos》の世界に転生させられるは
ずがまたもや女神のミスでIS世界の第二次世界大戦前の大日本帝国と《ハイスクー
ル・フリート》の世界に転生した。そして、主人公が戦死したことを期に、《ハイスクー
ル・フリート》の世界に性転換して16歳の姿で新たに転生した。体の中にユニオンコ

アを持つているが人間と同じとされる。航空戦艦土佐の艦長でメンタルモデルという位置にいる。その後、『ハイスクール・フリート』の世界で戦死した事で再びアテナに呼び出され、自分が織斑家に一応転生していた事を告げられる。それからIS世界に新しい特典を受け取り向かう。

伊川偲（いかわ しのぶ）

年齢：15歳

性別：女

身長：165.4

体重：（言わせませんよ？ b y偲）

階級：中佐

解説

旭日艦隊の副司令長官兼航空戦艦土佐の副長官。いつもしつかりしているがおちょくられるのは弱い。

専用機

機体名：レリエルガンダム

世代：第五世代

操縦者：織斑零

武装：頭部バルカン砲×4

ビームライフル×2

ビームシールド×2

ビームサーベル×2

装甲：対ビーム防御・反射システム「ヤタノカガミ」

ヴァリアブルフェイズシフト装甲（VPS装甲）

動力：GNドライブ

特殊機能：ディスチャージシステム

光の翼

ツインドライブシステム

マルチロックオンシステム

单一仕様能力：トランザム

内容：高濃度の圧縮粒子を全面開放する事により、機体スペックを3倍にまで上げる

事ができる。システム起動時にはGN粒子が赤くなり、それに伴つて機体自身も赤く発光するようになる。

機体解説

この機体は秉が前世持つっていた手帳に書いていた「ビルドストライクガンダム」の改造案の絵から作られた機体。所々に元の面影は残されている。機体の名前はユダヤ・キリスト教伝承の「夜」を司る天使レリエルからとられた。

機体外観

機体の外観はスター・タービルドストライクガンダムの腕の横側にストライクフリーダムガンダムのビームシールドを付けた感じ。機体の動力はコアの他にGNドライブとISコアのハイブリットでGNドライブはストライクビルドブースターに搭載されているGNドライブを同調させるツインドライブシステムを使っている。カラーは胸の所の青色の所と腕のビームシールドの赤色の所を白色にして肩の赤色ところを黄色にしてそれ以外は色を同じになつてている。要するに白色を中心にしてある。

ストライクビルドブースター

ドライブ×8

スター・ビームキャノン×2

装甲：対ビーム防御・反射システム「ヤタノカガミ」

ヴァリアブルフェイズシフト装甲（VPS装甲）

動力：GNドライブ

特殊機能：ディスチャージシステム

光の翼

ツインドライブシステム

マルチロックオンシステム

機体解説

ビルドブースターの翼の部分をストライクフリーダムガンダムの翼に、ビームキヤノンはユニバースブースターのビームキヤノンに変更しており、パックパックのコツクピット部はユニバースブースターのコツクピットになっている。また、機体と同じでVPS装甲とヤタノカガミが装甲に使われており、動力としてGNドライブが一つ搭載されている。また機体のGNドライブに連結、同調させる事ができるツインドライブシステムが搭載されている。カラーは白色中心になつている。

宵月（よいづき）

第四世代

装甲：超重力装甲

武装

45口径46cm2連装複合アクティブラーレット砲4基8門
超重力ユニット5基

40口径12.7cm2連装荷電粒子砲10基20門
50口径14cm单装荷電粒子砲

25mm3連装パルサーガン4基

25mmパルサーガン7基

垂直発射装置15基

対空高出力レーザーシステム

高電圧発生器

パッシブデコイシステム

零式艦上戦闘機22型：27機

零式艦上戦闘機62型：16機

彗星三三戊型／D4Y3-S：11機

艦上攻撃機流星改：14機

单一能力

第一：超重力砲

第二：全砲門解放

解説

零の機体。動力はISのコアとユニオンコアのハイブリット。ぶっちゃけ『航空戦艦土佐』を艦娘の艦装みたにした感じ。

单一能力が二つある事が特徴。

第十七話 霽、IS世界に現れたり

「転生完了したかな…って、え!?」

霁が次に目を覚ますとそこは霁が大日本帝国、ハイスクール・フリートを戦い抜いた土佐の第一艦橋だつた。すると横から声をかけられ、声の方向を向く。

「夜月艦長、やつと起きましたか?」

「伊川か…」

するとそこには第二次世界大戦、ハイスクール・フリートの世界と共に戦つた航空戦艦土佐副艦長、伊川偲中佐が立つていた。

「お久しぶりですね。夜月艦長」

「俺はIS世界に来た…んだよな?」

艦橋に居たことでちゃんと転生しているのか不思議に思つた霁は伊川副艦長に聞く。

「ええ、そうですよ。『我々』はちゃんと転生してますよ」

そうか、転生出来たのか…ん? 今聞き捨てならない事を聞いた気がする

「伊川中佐。まさかとは思うが我々とはこの艦だけだよな?」

「それはですね…」

旭日艦隊の全艦艇、

全乗組員です」

「な、何だと！」

それを聞いた零はすぐに艦長席から立ち上がり艦橋の窓から左右の海を見た、するとそこには第二次世界大戦で零が率いていた旭日艦隊の全艦艇が浮かんでいた。

零はハイスクール・フリートの世界に行つた時と同じで土佐の乗組員のみ居るものだと思っていたのだ。しばらくそのまままでいたが零は艦長席に再び座ると旭日艦隊の現在状況を副艦長に聞いた。

「伊川副艦長、本艦隊の現在状況は」

「はい。本艦隊は現在神津島沖を横浜に向け進んでいます」

「また、ISが加賀と赤城に15機ずつ、信濃に21機、そして本艦に量産機30機と艦長の専用機2機搭載されています」

「2機？ そんなにあるのか？」

そう思い付いた疑問を声にだした。

「えつ？ アテナ様から聞いてないんですか？ 艦長が言つてた機体と土佐の艦装型ISを送つたつことらしいですよ」

「そ、そろか…」

そう言うと零は啞然となつていた。そしてが黙り込んでからしばらくすると観測係

から報告が上がつた。

「艦長！レーダーに接近する不明機あり！距離2000！」

「…接近する不明機、だと？」

観測係からその内容を聞いた雪はI Sだろうと仮説を立て艦の指揮を執り出した。

「全艦隊に通達！第一種戦闘用意！各砲塔に砲弾装填、別命があるまで待機。それから偵察部隊の川木小隊を出すぞ！対空戦闘用意ッ！」

「了解、総員戦闘配置！対水上戦闘用意！偵察機川木小隊発艦！」

「各空母にI Sの発艦準備、待機させるように伝える!!」

副艦長の指揮と共に先程まで和やかだった艦の空気は一転した。それから数分後：「不明機！進路変更確認出来ず、本艦に向け以前接近中！」

そして雪は観測係に所属不明機が射程に入るまでの時間を聞いた。
「不明機が本艦の射程圏内に入るのは後何分後だ？」

「あと3分ちょっとって所ですね」

射程圏内に入るまでの時間を聞いてすぐに偵察に出ていた川木小隊から通信が入つた。

『不明機、敵対行動確認出来ズ。指示ヲ求ム』

『よし、川木機に打電『不明機ヲ引率シ、艦隊へ帰還セヨ』』

そう打たせると直ぐに川木機から『了解』と打電が入つた。

第十八話 千冬、見ゆ

所属不明機の I S 操縦者とが到着するまでの時間、長官室で待機していると扉がノックされ案内役の伊川副艦長が入室を求めてきた。

『長官、所属不明機の方をお連れしました』

「ああ、入ってくれ」

そう短く返すと伊川副艦長と I S 操縦者が部屋に入ってきた。そして零は自分の顔を見て驚いている相手に椅子から立ち上がり帽子を外すと微笑し、言葉を発した。

「やあ、久しぶりだね。千冬姉さん」

そして静まり返った長官室で伊川副艦長が横から質問をする。

「や、夜月長官のお、お知り合いでですか？」

「ん？僕の姉だよ？織斑千冬って言うんだよ」

「あれ？長官つて夜月ですよね？」

「ああ、それは k : わつ！」

そしてその説明をしようとした瞬間に千冬姉と呼ばれた I S 操縦者が零に抱きついてきた。

「ち、千冬姉さん?!」

「零、零、すまなかつた。あの時お前の事を見つけられなかつたんだ…」

零に抱きついた千冬は急に誤りだした。そして零はそれを許すこととした。

「そうちつたんだね：許すよ、千冬姉。それじゃあさ、そのソファーにでも座つてくれない？」

そして千冬が座つたのを確認すると零は敬礼をして階級等を名乗つた。

「まずはあれだね、改めて自己紹介でもするよ」

「大日本帝国海軍旭日艦隊司令長官兼旗艦、航空戦艦土佐艦長。夜月零、階級は少将だよ」ビシツ

そして名乗り終わると零は敬礼を終えるとここに来るまでに何があつたかを話し出した。

「さて、何から話そうかな…」

「大変なことをしてたんだな…。ところで私を案内してきた彼女は誰だ？」
千冬はそう質問すると出されたお茶を飲んだ。
「ああ、俺の嫁さんだよ」

そう零が言うと千冬が飲んでいたお茶を驚きのあまり吹き出した。

「よ、嫁！」

「冗談だ」

軽く千冬をおちよくる

「彼女は僕より優秀かもよ？」

そう言うと零は少し意外そうな意見を言つてくる。

「ほう～、そなのか？」

「そうだよ～？伊川忍中佐つて言つて僕と同じで旭日艦隊の副司令長官とこの艦の副艦長を軍に入つてから一年くらいでしてるんだからね～」「はうううう～!!」

照れている伊川副艦長をさらに二人はからかつう。

「優秀なのだな」

「そりや僕の副官だからね」

そしてしばらくおちよくなつたら零はこれからどうすればいいかを聞いた。

「んで、それよりも僕らはこれからどうすればいいの」
すると千冬は I S 学園に向かうように言つてきた。

「ああ、取り合えず I S 学園に来てくれ、そこで決めるからな」

「わかった。ならそうするよ」

『長官室から艦橋、進路そのまま。海洋上の学園に向かう』

雲はそれを聞くと伝声管で艦橋に戻り艦隊を I S 学園に向かうように伝えたのだつ
た。

第十九話 入学試験の戦闘狂と軍神

I S 学園について数時間後…

アリーナ

千冬に連れられ零はアリーナのピットに来ていた。そしてそこには緑色の髪の女性が一人いた。

「山田先生、任せてしまつてすまないな」「いえいえ、それよりその子ですよね？」

すると緑の髪の女性は零を見ると千冬に聞いた。

「ああ、零。この人は私の同僚で後輩の山田真耶だ」

すると玲は敬礼をして自己紹介をする。

「大日本帝国海軍旭日艦隊司令長官の夜月零改め、織斑零少将です。よろしくお願ひしますね、山田先生♪」

「きよ、旭日艦隊司令長官で旗艦艦長つまさかあの『軍神夜月』!!それが織斑先生の弟オ

すると山田先生は零の名前を聞いて驚きの声を上げた。

「山田先生、落ち着いて。深呼吸、深呼吸」「は、はい」

千冬に言われて山田先生は深呼吸して心を落ち着かせた。それから千冬は零を向いて話をしました。

「お前の試験官は山田先生にして貰おうかと思つていたが……私がしよう。あの軍神夜月の実力が知りたいからな」

「はい！負けませんよ」

すると零はそれを即答した。それを聞いた山田先生が慌てて止めに入る。

「お、織斑君！危険ですよ！」

「問題ありません。千冬姉さんには2回戦つたら1回は昔から勝つてましたから」

零が爆弾発言をする。すると山田先生は驚きの顔を見せた。

「確かにな、私も勝てるかどうかわからなくなる時があるからな」

そしてさらに千冬の追い討ちの爆弾発言に山田先生は驚きを通り越して固まつてしまつた。それを放置して千冬は零に話しかけた。

「零にお前の専用機に乗つてもらいたい。それから私は反対側のピットから出るからな」

「：一応打鉄で出るよ。それと負けないよ？千冬姉さん」

「私も負けはしたくない」

そう言うと千冬は山田先生を引っ張つて反対側のピットに向かつた。それを零は苦笑いで笑うしかなかつた…

『織斑君、発進、どうぞ』

玲がＩＳスースに着替え打鉄に搭乗してカタパルトに乗つてしまふするといつの間にか復活した山田先生から通信が入つた。

「了解」

「織斑零。打鉄、行くよ」

そう言うと打鉄は綺麗なバレルロールを描きながらアリーナの中に射出された。

「待っていたぞ、零」

「そんなの言わないでよ！」

アリーナの中に出ると千冬は既に発進して空中に浮いていて声をかけてきた。

「…さて、逝こうか…」

零が千冬にそう返すと試合開始のブザーが鳴った。

そして先手を取つたのは千冬だった。

「ハアツ～！」

千冬は打鉄の搭載武器の刀をイグニッションブーストをして急接近し、降り下ろした。しかし零はそれを同じ刀で受け止めた。

「やるな！流石は軍神！戦いがいがある!!」

「ぐつ！今度はこつちの番です！」

そして零はイグニッショングーストを使いながら千冬の打鉄に蹴りを入れ、突き飛ばすと刀を千冬の腹目掛けて刀を打ち込もうとしたが今度は千冬がその攻撃を防いだ。

「グワッ！」

「まだまだ、甘いぞ！」

そして千冬は零の刀を払つてお互に離れ、状態を整える。それから零と千冬は円を描くように回り、一度ぶつかるとまた回りまたぶつかるを繰り返した。

そして試合開始から20分後千冬と零がお互いの機体の腹部に刀を殴り付けると大きな衝撃波が作り出され両方の機体が解除された。するとしばらくして試合終了のブザーが鳴った。

『しょ、勝者！織斑零！』

そして山田先生が戸惑いながらも判定を告げた。寸分の差で零がスピードで勝つていたのだった。

しばらくして零は千冬と同じピットにいた。。

「いや、負けるかと思つたよ」

ピットに入ると玲は気の抜けた声を出した。

「お、織斑君が本当に織斑先生に勝つちゃつた……」

するとピットにいる山田先生が小さく呟いた。そしてそれを聞き取つた千冬が山田先生に答えた。

「だから言つただろう、零には2回やれば一回は負けると」

すると山田先生は驚きの声を上げた。

「だ、だつて！ 織斑先生引退したとはいえ世界最強ですよね！ それだと織斑君も世界最強になっちゃいますよ！」

「そもそもうか！ しかし実際玲に圧倒的に勝てる物は無いからな。剣道でもいつも引き

分けか敗北のどちらかだつたからな！ 霽も私と同じ世界最強だな！」

「それにやつと霁に張り合える物が出来たからな、嬉しいから良い」

「ほ、本当に織斑先生が I S 以外霁君に勝てないんですか？」

山田先生が千冬の言葉を疑問に思い、千冬に聞いた。

「ああ、そうだぞ？」

山田先生の疑問に答えた千冬は霁にこれからのこと話をす

「霁、明後日から学校が始まるから取り敢えずはお前の艦で居てくれ」

「後で制服とかを届けるからな」

「了解」

返事をすると霁は立ち去ろうとしたが千冬に言い止められた。

「そういえば霁。お前に艦で渡した教科書とかは目を通したか？」

「もちろん♪ 全部暗記済みだよ！ あんなの軽い軽い♪ 最少年将官なめないでよね♪

意気揚々と霁は答える。

「そんな生易しい物じやなかつた気がするんですけど……」

その答えに山田先生は頭を抱えた。

「それじゃあ、先に帰つてるね」

そして霁は内火挺に乗つて艦に向かつた。

第二十話 妹との再開と自己紹介

入学試験の二日後、千冬と雪は1—Aのクラス前まで来ていた。

「雪、私が呼ぶまで待っていてくれ」

「了解」

教室の前まで来ると千冬はそう言つて教室に入つていった。すると直ぐに教室が騒がしくなつてきた。

ゲツ！オニイー！

ゴツーン！

ダレガオニカ！ダレガ!!

↓↓↓↓↓しばらくお待ち下さい↓↓↓↓↓

しばらくして静になると千冬が雪を教室に入るように伝えてきた。

「少し諸事情で遅れてきた奴がいるから紹介しよう」

「入つてくれ」

それが聞こえると零は教室に入った。すると一部の生徒がどよめきだした。

「えつ？男？」

しかし、気に止めることなく零は教卓の所まで進むと自己紹介をした。

「大日本帝国海軍旭日艦隊旗艦土佐艦長兼司令長官の“織斑”零大将です。どうぞよろしく」

一瞬、シーンと静まり返ったのち一気にクラスの驚きが爆発した。

「『えええエエエエエエ!!!!』」「！」

「）、この間転移してきた大日本帝国の英雄ウ～！」

「お、男の娘だアア～！」

「その前に織斑つて…」

誰かがそう呟くと直ぐ次の瞬間、零の事を知っているある二人が席を勢い良く立ち上がり叫んだ。

「何で零（お兄ちゃん）がいるんだ（の）！」

「久しぶりだな、一夏、篝くん」

零が挨拶をすると直ぐに千冬が口を開き、静にするように渴を入れる。

「静にしろ！バカどもが!!」

「それから零、さつさと座れ」

「はいさつさー」

そして零が席に座った事を確認すると千冬は授業を再開させた。

「よし！授業を始めるぞ!!」

「織斑くん。今でわからない所はありますか？」

授業が始まりしばらくすると副担任の山田真耶が零に分からぬ所が無いかを聞いた。

「いえ、問題ありません」

山田先生の問いに零はそう答えると千冬が零に授業の問題を出した。

「それでは零、ISのコアはISの核となるパーツで製造方法は篠ノ之東博士しか知つてい

なくて、コアの情報は自己進化の設定以外は一切開示されていません。そして全容はブ
ラックボックス状態で、ISが宙に浮くのは浮遊・加減速を行う。一種の慣性制御シス
テムのP.I.Cが搭載されているからです」

千冬はスラスラと答えられ、一瞬啞然としたが直ぐに立ち直った。

「あ、ああ、よ、よくわかつたな！」

そう言うと千冬は生徒に再び分からぬ所が無いかを聞いた。

「よし、他に今のところで分からぬ者はいるか？」

そしてそれには誰も答えない。把握しているという事だ。するとその直後、授業終了のチャイムが鳴つたのだつた。

第二十一話 休み時間とお決まりの挨拶を

「ねえねえ、しず」

授業が終わり、休み時間になると雫は誰かに話しかけられ、雫は反応を見せる。

「ん？ しづって僕の事？ てか、君は？」

「雫だからしづだよ。それで私は布仏本音だよ！」

「ならのほほんさんだね、のほほんつて感じしてるし」

「いいね～ありがと！ しづ！」

雫は本音にもあだ名を付けた。すると本音は喜んで席に戻つて行つた。そして本音が席に戻つて行くとまた、誰かに声をかけられた。

「ちよつとよろしくて？」

（あー、こいつあれだな）

雫はそれを聞くと女尊男卑に染まつた原作だとお決まりの奴だとすぐにわかつた。

第二次世界大戦で勝利してまだ大日本帝国という名前のこの国で女尊男卑の考えは天皇陛下が否定したため通じない。そして雫は知らない不利をした。

「誰ですかね？」

「まあ、私を知らないというのですか？イギリス代表候補生にして主席入学のこのセシリ亞＝オルコットを」

「ご丁寧にセシリ亞は原作通りの台詞だ。玲は前々から考えていたことを答える。

「ええ、知りませんね」

「まあ！何ですかその態度！だいたい私に話しかけられただけで光榮な事ですよ。それ相応の態度というものがあるでしょ。」

それにセシリ亞は声を大きくして喋り出す。すると雲はセシリ亞に怒鳴る。

「知るか！貴様はこの国では女尊男卑の考えは通じんと知らんのか！」

「そ、それは……っ！また来ますわ!!」

雲の激に一步引いたセシリ亞だつたがすぐにハツとして我に帰えると怒鳴られた事で頭がこんがらがり話を忘れてしまい、捨てゼリふをはいて自分の席に戻つて今度は筈と一夏に話しかけられた。

「雲、ちよつといいか？」

「雲兄さん。ちよつと」

(なんかよく話しかけられる日だな～ハロハロハロ～)

雲は一瞬現実逃避したがすぐに現実に戻つて來た。

「屋上でも行くか？二人とも」

「ああ」

そう言うと零と箒と一夏は屋上に向かつた。。

「ひ、久しぶりだな零」

「ああ、久しぶりだね！お兄ちゃん」

「ああ、久しぶりだな。箒、一夏」

そう零は返答した。すると二人が一斉に質問をしてくる。

「そうだ！零は（お兄ちゃんは）今までに何があったの!!」

「あ、ああ、それは：」

そして零は今までに起こつたことを説明した。

零が説明し終わると今度は筈が質問をした。

「そうだつたのか…それになぜ軍に入つたのだ？」

「色々とあつたからかな／＼気づいたらそこに軍の勧誘があつたからかな／＼」

それに零はしつかりと答えた。そして零は「一人に教室に戻るよう促す。そろそろ教室に戻らないと千冬姉さんの鉄拳が落ちるぞ？ 三分前だし」

「何？い、急ぐぞ…つて、もういない！」

千冬の▣▣鉄拳”と聞くと筈と一夏は慌てだし、教室に急いで入つて行つた。しかし二人は間に合わずに千冬の鉄拳を食らつたのだつたよ▼

第二十二話 イギリス貴族とのイザコザ

授業が始まりしばらくすると千冬が何かを思い出したように生徒を向いて話し出した。

「今から授業の前にクラス代表を決める。自推や推薦があるものは挙手しろ」

千冬がそう言うと一夏が一斉に手をあげだした。

「はーい！お兄ちゃんが良いと思いまーす！」

「一夏?!」

「ごめんなさい」

雪は気の抜けた声を出す。しかし、他のクラスメイト達も口々に言い出し始めた。

「私も織斑君が良いと思う！」

「私も！」

「私も！」

「他には自推等は無いか？無いなら織斑に決まるが」

千冬がクラスメイト達の騒ぎを止めるように言う。
「納得いきませんわ！」

その中でセシリ亞が机を叩き反論をし出した。

「代表候補生である私ではなく、なぜ男を代表にしなければならないのですか?!」

「だいたい極東のさ…」

それを聞いた雲も額に怒りのマークを浮かばせながら立ち上がりセシリ亞に反論を叩き出した。

「ほお～？その極東の人間にボロ負けて降伏しただろうが！旭日艦隊差し向けつぞコラツ!!」ピキッピキッ

「な、なんですって！」

雲に負けじとセシリ亞が言い返した所で千冬がそのいざこざを納める案を出す。

「両者そこまでにしろ。決着は二週間後！第二アリーナで行うものとする！」

「了解だよ」

「ええ！よろしくてよ！」

それに対しても雲とセシリ亞は自信満々に了承した。それから雲は千冬の方をに向いて口を開いた。

「それじゃあ、織斑先生？本気でやつてもいいんだよね？」

「まあ、良いだろう。ただし、殺すなよ？」

「はーい」

((((なんか、不穏な言葉が聞こえた気が……))))

そうクラスメイトのほとんどが思つたが怖くて口を聞き出せはしなかつた。
「よし、それでは授業を始める！」

そして零とセシリ亞が座ると千冬は話を切り上げ授業を始めた。

授業が全部終わつた後

今日の授業が全て終わり、帰ろうとしているところに山田先生がやつて来て話しかけ
てきた。

「織斑君、ちょっと良いですか？」

「どうしましたか？」

「寮が決まつたので鍵を届けに来ました」

「あれ？ 急に決まつたから一週間程自宅から登校になつてた気がするんですけど？」

「えうつと、IS学園の中に居た方が安全だろうと言うことで急遽決まりました」

零は山田先生に理由を聞かされると新に質問をすると千冬が現れた。

「けど、僕荷物とか持つてきてないんですけど…どうしましょうか」

「お前の荷物は私が部屋に運んであるから問題は無いぞ」

「……わかりました。部屋はどこになるんでしょうか」

部屋が決まつたと言われた零は山田先生に部屋は何処かと聞き返した。

「あ、はい！ エうと1025室ですね」

「1025室…了解しました」

部屋を教えてもらうと零は鍵を受けハロに量子化し、部屋に向かつて転がりだした。

第二十三話 部屋と零と

零は1025室の部屋の前までくるとハロのアームを起動して扉を叩いた。

コンコン コンコン

(反応無しですかいな!!仕方ないですけど部屋に入らせてもらいますか)

反応がなく困った零は仕方なくハロのアームを使いドアを開けてアームを戻すと転がつて部屋に入った。

「……誰?……」

零は部屋に入ると声をかけられた。そしてすぐに声のした方を向くと零の青い髪とは違う水色の髪を持つ少女、更識簪がいた。

「ボール?」

簪はハロを見るなり呟いた。それを聞いてから零はハロの量子化モードをOFFにした。するとハロが光だした。

「えつ!なにが起つてるの!……え?……人?」

光だしたハロを見た簪はそう反射的に言つたが中から零が出てきた事に驚きを隠さない様子だつた。

そしてハロから出た零は簪に自己紹介をした。

「始めてまして、僕は織斑零っていうんだ。よろしくね」

「…私は更識簪。苗字読みが嫌いだから簪でいい」

ハロから急に現れた玲に簪は一瞬戸惑つたが返事をした。そしてから零は簪にハロの事を聞かれ、説明をし出した。

「…それであなたが出てきたボール…何？」

「え？…これは僕が作ったA-I搭載移動型研究室って言つて名前はハロだよ」

「ハロ！簪！ヨロシク！ヨロシク！」

零の説明が終わるとハロが耳をパタパタさせながら自己紹介をした。それを見るなり簪は目を輝かせながらハロを見ていた。それを見た零は簪に質問を出した。

「…かわいい…」

「そうでしょ。簪もいる？」

「うん！ほしい！」

零がそう聞くと簪は元気よくうなずいた。

「また作つて渡すよ」

簪の返事を聞いた零はまた作ると言うと話の話題を切り上げた。

「そうだ。簪、シャワーの時間帯とか決めておこうよ」

「なんで？」

零の切り出した話題に簪は頭の上に疑問符を浮かべた。

「だつて僕が男だからだけど？」

「え！ 零って女の子じゃなくて男の娘だつたの!?」

案の定簪は零は男だという発言に驚いた。

（なんか子が娘になつてなかつたか？）

「……なあ、簪。最近テレビのニュースとか新聞とか見たか？」

簪はその質問に見ていないと答えた。その答えに零は頭を抱えて現実逃避仕掛けたが簪に肩をつかまれて現実に引き戻された。

「ほ、本物の男の娘だ！ 夢にまで見た、男の娘が、目の前に！」

「か、簪さん？ ど、どうしたんですか？」

零は簪の豹変ぶりに戸惑いを隠せない。そして零は簪にどうしたかを聞くと簪が大声を出そうとした。

「零！ 私と付き合つて！」

それから零は聞き返した。

「だけど僕には一応一人いるけどそれでもいいの？」

すると簪は返事をした。

「うん！ よろしく、
零！」

第二十四話 歴史の教科書に載つてんのかよ!?

「そろそろ眠ろうよ。明日寝過ぎたらヤバイからね」
「わかった」

「おやすみ、雲は簪と友達になつてからしばらく話してから雲は簪に明日の為に眠るように促した。

「おやすみ、簪」

「おやすみ、雲」

そして雲は簪に話しかけてから眠りに落ちた。

その翌日

零と簪はと/orうと食堂に來ていたのだつた。

「さてと、何をたべようかな？」

「…私はB定食」

「んじゃあ、僕も同じB定食にするか」

「B定食ふたつ下さい！」

零は簪がB定食にすると聞くと零も同じB定食にすると言つて注文し、定食が出来てから席に座り食べていると横から先輩に話しかけられた。

「君よね？代表候補生に戦い挑んだ新入生つて」

「ええ、そうですが」

「零、代表候補生に戦い挑んだの？」

簪がそれを聞いて反応する。

「ならさ、ISのこと教えてあげようか？」

「ありがたい事ですが、遠慮させてもらいますね」

先輩からISの事を教えてくれると言われたが零はそれを断つた。

「なんでなの？」

先輩は思いもよらない答えに驚き、零に聞き返した。

「自分の実力が今の時代でどこまで通用するのかを試してみたいし、何より最近は仕事が多いので訓練をする時間が取れないんですよ」

「そうですか…なら、頑張ってね。応援します」

玲の断つた理由を聞くと先輩は玲に応援すると言つて席に戻つて行つた。先輩が戻つていくと今度は簪が話しかけてきた。

「本当に勝てるの？」

「もちろん」

「…零、油断してると負けると思う…私達代表候補生はISの搭乗時間3桁行つてゐるから」

簪は零に油断しないようにうながすした。

「まあ、大丈夫だよ。僕仕事に関係があるからからね」

「…その仕事つて何なの？」

「うん、簪は大日本帝国海軍の旭日艦隊旗艦の航空戦艦土佐つて知つてるか？」

零は自分の仕事について話す前に零の乗艦の土佐を知っているかを聞いた。

「大日本帝国を勝利に導いたっていう軍神夜月零大将の乗艦で旭日艦隊旗艦でしょ？最近旭日艦隊全艦と英雄が戻ってきたって話題になつてたし、歴史でも習つたからから知つていてる。けどなぜ？」

（歴史の教科書なんかにも載つてるとかよ!!）

「僕が帝国軍人でその夜月零だから」

そう言うと簪が食いついてくる。

「…ほ、本当に？だけど零つて織斑じやなかつたつけ？」

「そうだよ？本当はこの時代の人物なんだけど昔にタイムスリップして記憶喪失になつてたから違うんだよ」

「それから言うともう一人の彼女は土佐の副艦長だからね！」

それを聞くと簪は驚いた顔をした。それから零は時計を見ると時間がヤバイことに気がついた。

「時間がヤバイ！急ごう！」

「う、うん」

そう言うと零と簪は食器を返し、授業に向かつた。そして何か特別なことが起ころうけでもなく、平和に二週間が過ぎていき、決闘の日が訪れた。

第二十五話 クラス代表決定戦

クラス代表決定戦当日

第二アリーナのピットには零、簪、筈、一夏、千冬がいた。

「そうだ。ねえ、千冬姉さん」

何かを思い出したように零は千冬に話しかけた。

「どうした?」

「ISの詳細だよ」

零はそう言うとハロの中からISの機体性能等を書いた紙を千冬に渡した。

「零!なんだこれは!」

するとそれを見た千冬が驚いたかと思うと大声を出してきた。千冬が大声を出したことが気になり、簪と一夏、筈が零の機体の紙を覗いた。

「なにこれ、ISコア以外に知らないのが付いてる……永久機関!?それに第五世代なんて……」

それを見た簪も驚きを隠せない。それを見た零は説明をする。
「すごいでしょ」

それを聞いた千冬は零にまた、質問をした。

「零、いつたいどこでこの機体を手に入れたんだ」

「どこでつて…どこでもなにも自分で作つたんだけど」

そう言うと簪が質問をしてきた。

「…零、ISつてどこにあるの？」

「このチョーカーだよ！」

零は首にあるチョーカーをさわり、起動させた。それに簪はものすごい興味を見せた。

「ふ、船？」

「いや、軍艦だな」

「そだよ！それじゃあ行くか！」

これはまずいと思った零は急いでカタパルトに乗り込んだ。カタパルトに乗り込むと簪が呼び止めてきた。

「零」

「頑張つてね」

「頑張つて！」

「零、勝つてこい！」

「了解！」

返事をするとスピーカーから山田先生の声が聞こえてきた。
『発進タイミングを織斑君に譲渡します』

「了解」

「宵月！ 織斑 霙！ 出るぞ！」

発進合図をした霧はアリーナに射出された。

アリーナ内

「遅かったですわね」

「雲が発進すると既にセシリ亞が空中で待機していた。

「色々とあつたからね」

「さて、行こうか」

「踊りなさい！私のワルツで！」

「海戦開始だ！」

そして雲とセシリ亞が決め台詞を言つて数秒後、試合開始のブザーが鳴り響いた。
先に動いたのはセシリ亞だった。

「それでは！お別れですわね！」

セシリ亞はそう言うとスターライトMk—IIIを雲に向かつて発射した。

「おつと！」

しかし雲はそれを軽々しく避けるとセシリ亞に向かつてビームライフルを発射する。
しかしそれをセシリ亞は回避をする。しばらく銃撃戦が続いた後セシリ亞は四機の
ビットを発射してきた。

「ファンネルかよ！」

「ファンネルではありませんわ！」

零はそう言うとセシリ亞にビームサーベルで斬りかかろうするがビットが邪魔をして来たためブースターを吹かして後ろに後退する。

「オルコット！似たようなのはこっちもあるんだよ！」

「ファツシブデコイ！航空機部隊！発艦、始め!!」

「なつ！BT兵器!!」

「言つとくと全機オート操作だ！」

零はファツシブデコイと航空隊を全て発射するとセシリ亞のビットを潰しだし、30秒で四機全てを撃ち落としてしまつた。

「ブルーティアーズが、一瞬で……」

(ブルーティアーズって言つたのか…忘れてた)

それから零はビットが無くなつたことでビームサーベルを掴むと、イグニッショングーストを使いセシリ亞に接近して斬りかかろうとした。

「これで！」

「かかりましたわね！」

「なつ！」

「これで！フィナーレですわ！」

セシリ亞はそう言うと雲に向かつてミサイルを発射した。ミサイルは雲に命中し雲は煙に包まれた。

そしてミサイルが直撃してからしばらくすると煙が晴れその中からクラインフィールドを展開している鋼鉄の機体が現れた。零の艦装、宵月だ。セシリアはクラインフィールドを展開している宵月を見ると叫んだ。

「!? それになぜ直撃して無傷ですか!!」

「それは機体性能だ！それよりも行くぜ！」

電は面倒が起る前に話を切り上げると超重力砲の発射体勢を取る。

照準

すると零の機体が白く輝きだした。そして零はすべての機体や武装でセシリ亞のブルーティアーズに照準をあわせる。

「第一、第二单一能力発動！」

「超重力砲！全砲塔！撃てエエエッ！」

「キヤアアアアアア！」

超重力砲が命中すると追い討ちをかけるように航空機や主砲等から発射された侵食魚雷や銃弾やビームはセシリ亞のブルーティアーズに吸い込まれるように全弾命中し、しばらくして試合終了のブザーがなつた。

『勝者！織斑雲！』

それから雲はセシリ亞を探した。そしてセシリ亞は機体が解除されて地上に尻餅を付いていた。それを見つけた雲はセシリ亞に話しかけた。

「大丈夫ですか～？」

セシリ亞は雲に訪ねる。

「どうしましたの：笑いに来ましたか？」

それを雲は笑いながら否定したてセシリ亞に質問する。

「それは無いね。ただ大丈夫か確かめに来たんだよ、それよりも立てるか？」

「た、立てない？あれ？おかしいですわね？あれ？腰が抜けて立てない……うわっ！」

「ピットまでお送りしますよお嬢さん？」

「は、はい」//

(なんか頬が赤いような：まあ、いつか!)

立てるかと聞かれて立とうとしたセシリ亞だつたが腰が抜けて立てないようだつた。それから雲はセシリ亞をお姫様抱っこでピットまで連れていった。

第二十六話 クラス代表パーティー

クラス代表決定戦があつた日の夕方、雲達一年一組は食堂に來ていた。食堂には「祝！織斑君、代表決定！」と書かれた看板が立て掛けられている。これはクラスの人が作ってくれた場所だつた。

「「「「「織斑君クラス代表決定おめでとう！」」」」

クラスメイトが祝いの言葉を玲に捧げた。

「みんなありがとう。それよりも楽しもう！」

雲はそう言うと間をおいて宴の始まりの合図を出した。

「かんぱい！」

「「「「「かんぱい！」」」」

（飲めや歌えの大騒ぎ中）

宴が始まり、40分くらいたつ頃に誰かから呼ばれていると言われ、雪はその人のもとに向かつた。すると呼び出した人から名刺を出された。

「私は薫子。よろしくね。新聞部副部長やつてま～す。」

「今日は学園で話題の軍神夜月の織斑雲大将に特別インタビューをしにきました～！」

クラスメイト達が騒ぎ出す。しかしそれに目もくれず薫子は手帳とボイスレコー

ダーを持ち出して質問をしてくる。

「織斑大将、代表になつた感想を！」

「大日本帝国軍人として当然です」

「いいね～捏造しなくて良さそうだ。」

それに対して薫子はなにやら恐ろしいことを言つてきた。

（捏造しようとしてたのかよ！怖いわ！）

零がそう考えていると薫子は次の目標に質問を出す。

「じゃあ、セシリ亞ちゃんと一夏も感想ちようだい」

「行方不明だつたお兄ちゃんに会えて嬉しいです！」

「いいねえ～！生き別れの兄妹との再開：いいわ」

「そうですわね、まず零さんに「やつぱり長そだしいや。織斑大将に惚れたつてこと

にしどくわ」間違つてないですが：最後まで言わせてくださいまし！」

（セシリ亞、えつ、間違つてないのかよ！否定してほしかつた……）

心の中で少しばかりガツカリした零であつた。

二人に質問をし終わると薰子は写真の催促をしだした。

「専用機持ちの二人ならんでならんで、写真とるわよ～」

「7. 850 ÷ 0. 462 は？」

「わかりますか！（わかるか！）

「16. 9913419913 だね」

「なんでわかりますの！」

（えつ？ 便利だよね～霧の能力って）

「正解♪」

薰子はそう言うとシャツターを切つた。シャツターが切られて写真が撮られるとと

回りにクラスメイト達がいた。

（どんだけ早いんだよ！人間技じやないだろ！）

写真を撮り終わるとクラスメイトの一人が喋りだした。

「なんか織斑君の頭の上にわっかができるてたような…」

「気のせい気のせい」

「たしかに頭にわっかが出るなんて事無いもんね！」

零はそれをなんとか誤魔化した。

（危なかつた！焦つた！）

そうして零は成なく就任パーティーを乗り越えた。

第二十七話 中國娘の襲来

■翌日 教室

「グーテンモルゲーン！」

挨拶をして教室に入る。するとクラスの女子が話しかけてきた。

「ねえ、織斑君そういえば、今日二組に中国の代表候補生が転校して来たの知ってる？」
「中国からの転校生？」

あ、鈴か！……鈴だと思う！けどいろいろ原作があれだしなあ

「今時の代表候補生とは……」

「わたくしの存在を危ぶんでの転校でしょう！」

無いだろ流石に

「「「「それは無いから安心して！」」」

「それはないですわ！」ウルウル

あ、被つたね！流石！

クラスメイト達がそう言うとセシリアは若干涙目になつていた。

「ま、専用機持ちが1組と4組のみだから勝利は頂だね！」

「フリー・パスは我らの手に～！」
すると横からクラスメイト達の陽気な声が聞こえてくる。そして一人のクラスメイ

トが零に話しかけた。

「織斑君？ 勝てるの？」

「まつ、機体の奥の手がドラ○もんの空気砲の実写版みたいなものだから気にしなくていいだろ」

「――久しぶりね！ 零……って！ なんでそれをあんたが知ってるのよ！」

「気にするな、俺は気にしない」

「気にするのよ！ どこで知ったのよ！」

「鈴は凄い勢いで問い合わせてきた。しゃあないか！」

「本当に知りたいの？」

「ええ！ どうしたの！」

「開発者にちょっとしたO・H A・N A・S Iをしただけだから」ハツハツハ！

「いったい何をしたのよ！」

「知りたい？」

「ええ！」

面白いな…

「あれと同じ事をしてほしいの？」

「えっ？ 何かしたの？」

「フフフ…」（黒い笑み

「や、やつぱりいいわ！」

ありや？ そうなの？ それを聞いた零は他のクラスメイト達を見た。

「「「「いえ！ 遠慮させていただきます！ 大将閣下!!」」」

なんか全員拳銃不審で敬礼してきたんだけど？

「冗談なんだけど…ハア～」

「「「「冗談なの?!」」」」

まあいいかそれより…

「それより鈴、早く教室帰れよ？ “鬼” がいらっしゃるぞ？」

「そ、そ、う！ ジヤ、ジヤあクラスに戻るわ」

鈴は零の “鬼” という言葉に何かを思い浮かべそそくさと教室に帰つていった。 鈴が教室に帰つていくとセシリリアと箒が側に来て聞いてきた。

「あの方は（あいつは）誰ですか！（誰なんだ！）」

「鈴はただ単に箒と入れ違いに入ってきた転校生。つまりは第二の幼馴染だね」

「とりあえず昼休みに話すから座ろうな？織斑先生から鉄拳が来るぞ？」

「な、なるほど。それでは失礼いたしますわ」

「わかった：しつかり説明してもらうからな！」

そう言うと二人は自分の席に座った。

第二十八話 食堂

時と場所変わりまして食堂

食堂では僕とセシリ亞と筈、そして、事の元凶の鈴が居た。

「待つてたわよ…零！」

食堂に入ると食券販売機の前に仁王立ちした鈴が叫んできた。

「ちよい邪魔、暇なら先に席取つといてくれない？」

「わ、わかつたわよ…」ガツクシ

氣合いを入れて大声をだしたのに軽く流された鈴はガツクリと肩を落とし、席を取りに行つた。

それからは、セシリ亞と箒と簪を連れて鈴がいる席に座つた。セシリ亞と箒が叫びを上げる。

「誰ですの！この方は！」

「零！誰なんだこいつは！」

「さつき教室で言つたろ？こいつは鳳鈴音だ。箒と入れ違いの転校生だつた幼馴染だ。しいて言えば箒がファースト幼馴染で鈴がセカンド幼馴染だな」

それには冷静に説明した。

説明が終わるつてからセシリ亞と箒を見ると顔を少しひきつらせた。

「ファースト幼馴染…私が、ファースト…」

「零さんの彼女じゃないならまだわたくしにもチヤンスが…ブツブツ」

そこには自分の世界にのめり込んでいて禍々しいオーラを醸し出している二人がいたからだ。その禍々しいオーラを無視して鈴が話を切り出す。

「そういえばあんたイレギュラーなわけだから専用機とかあるの？」

「ん？ ああ、専用機はあるよ。自分で作つた『第五世代 IS』がな」

「なんで IS なんて作れんのよ！ しかも現段階を越えてる第五世代なんて！」と驚きに声をあげる。

「第五世代って、オーバースペック過ぎますわ！」

「第一に IS を作れること自体がおかしいわ！」

そしていつの間にか復活した筈とセシリ亞も反応を示してきた。 霽は静かにするよう騒ぎ立てて、三人に質問を出す。

「じゃあ問題だ、ISを作つたのは誰だ？」

「筈さんのお姉さんの篠ノ之東博士ですかよね？」

セシリ亞が素早く答えた。さらに霁は質問を重ねる。
「なら筈達姉妹と幼馴染なのは？」

「「…あつ」」

そう霁が言うと三人は何かを理解したように呟いた。

「そつ、IS作りの手伝いとかしてたから覚えた」

「「…マジで？（マジですかの？）」」

それを聞いた三人は不思議そうな顔をしてきた。

「マジもマジ、大マジだぞ？」

「「え〜！」」

すると三人がと叫んだがそれを零は渴をいれ黙らせる。
「静かに！」

すると効果があつたのか三人は落ち着きだした。

「ねえ、零。 I Sの練習見てあげよつか？」

そして食事が終わると鈴は零に問いかける。それにセシリ亞と篝が便乗して名乗り
を上げる。

「わたくしたちが教えて差し上げますわ！」

「私達がする！」

と声を張り上げた。それを零は用事があると言つて話を切り上げる。

「これでも大戦中の英雄だぞ？元は戦闘機乗りだ」

「嬉しい話だが今回は遠慮するよ。放課後は用事がな」

「「そ、そんな」」

三人はそれを聞くなり肩を落とした。

「次の授業遅れるなよ？」

それから零は肩を落とした三人を見て軽く笑いながら次の授業に向かつた。

第二十九話 対戦相手発表

（クラス対抗戦当日）

クラス対抗戦当日に零は鈴と一緒に対戦相手を確認しに来ていた。

「それにしても何組が相手なのかしらね？」

鈴は発表場所の一歩手前の曲がり角を曲がり、話しかけてきた。

「まあ、鈴と当たるまで負ける気はないよ」

零は少しうんざりと言った感じを隠しながら返事をした。

「私は零と当たつたら私が勝つけどね♪」

すると鈴は自信満々に人差し指を回しながら言う。

そして、対戦相手の発表時間になると零は小さく呟き、鈴は少しワクワクしながら画面を見る。

「そろそろ対戦相手発表の時間だな」

「そうね、さあ、私と戦うのはだれかしら～」

「「……はいイイ！」」

そして零と鈴は驚きの声をだした。その対戦表の画面には…

第一試合

一組 織斑雲 V S 二組

凰鈴音

そう記載されていたのだ。二人ともいつかは当たると思つてはいたが第一試合で当たるとは思わなかつたのだ。そしてから数分後、落ち着いた一夏と鈴は第一試合の用意の為にアリーナのピットに向かつて行つた。

「アリーナ

零、千冬、簪の三人がピットに來ていた。そして、千冬が質問をしてきた。

「零、今回の機体は何なんだ？」

「ん？ 今回は“イージスガンダム”っていう機体だよ」

零はごく普通に答えた。それを千冬は気に止めていらない様子だつたが、簪はガンダムというワードに違和感を覚え、名前を繰り返した。

「イージスガンダム？」

「そつ、ギリシャ語で盾の意味をもつ機体だよ」
そう答えると再び質問をしてきた。

「ねえ、零。その“ガンダム”ってすごいのとか積んでるの? というかその機体の世代って…」

「んにや。よくわかつたねえ! そだよ! こいつは第3・5世代機だよ!」

零は呑気に答えた。それに、千冬が食い付く。

「なに! 3・5世代だと!!」

「本当に零って規格外!」

それをよそに零はそう呟いた。その呟きを聞き取った零はこのガンダムの事について話し出した。

「それにこの機体つて一応試作機だからさ!」

それに簪が反応する。

「試作機でこれ…」

それもそのはずである。この機体、3・5世代としてあるが実際は第四世代と変わらない機体性能を持つていたからで、これを作ったのが零というのだからさらに驚きだ。そして、零は後ろで軽く威圧感を放っている千冬に気がつき、足早にカタパルトに機体を展開し、乗った。

そしてカタパルトに乗ると山田先生から通信が入った。

「発進タイミングをイージスガンダムに譲渡します。」

「織斑零。イージスガンダム…出るよ」

それから零は名前、機体名を言つてアリーナへ発進していくつた。

第三十話 クラス代表戦

「来たわね！ 霽！」

アリーナ内で待っていた鈴が大声を出してきた。

「もう発進してたのか？ 鈴」

「ええもちろん…てつ！ あ、あんた、全身装甲！」

鈴は霁のＩＳを見るなり叫んだ。

「鈴？ そんな事より早く殺ろうよ、試合をさ」

「そんなことって…それよりなんかニュアンス違わなかつた！」

あり？ わかつたんだあ、すごいね！ 鈴！

「…まあいいわ、早く始めましょか」

そうすると試合開始のチャイムがなる。それと同時に二人が叫ぶ。

「僕が！（私が！）勝つ!!」

それと同時に霁は腕のビームサーベルを展開して突撃して行くためにとブースターを吹かした。

「
グ
ハ
ツ
!!
」

しかし零とイージスガンダムは前には進まなかつた。零に何か見えない何かに進路を叩き落とされた。鈴はそれを見て叫んだ。

「どう！私の衝撃砲は！」

これが見えない砲か！…とすぐに納得した。

「それが空気砲か……なら！」

「!!、変形した!!」

雲はそう呟くと機体を巡航形態に変形をして鈴の甲龍に向かつて突撃する。

そして鈴は進行を防ごうと衝撃砲を撃つた。そして誰もが命中したかと思われた。

「「!!」」

が、雲はスラスターを駆使して急降下をし、衝撃砲を避けた。そして鈴が驚き止まつているところにスキュラを発射した。

「グフッ！」

そのスキュラは見事に腹部に当たり甲龍のシールドエネルギーが見事に残り100まで減らした。そして雲が鈴に止めを刺そと人形に変形し、ビームサーベルを展開し斬りかかるとした時

ド
ゴ
ー
ー
ー
ン
!!!

アリーナの天井を破つて黒い何かが入ってきた。鈴がそれを見て叫んだ。

「なに!!」

それをよく見てみるとそれはISだとわかつた。そこに織斑先生から通信が入る。
『織斑！凰！教員隊が突入するまで持ちこたえられるか！』

玲は織斑先生先生に質問をした。

「了解、殲滅してもいい？」

『あ、ああ、できるなら構わないが無理はするなよ？』

織斑先生はそう言つて通信を切つた。すると零は鈴を見ると通信を入れる。

『鈴、俺がアイツを殺るから退いてくれ』

しかし、鈴はそれに反応し、叫んだ。

「ちょ！あんただけであんなの倒せるの!!」

「ああ、絶対に勝つ！」

そう言うと零は不明機に向けてビームを発射した。しかし、不明機にビームは不明機が避け、当たることはなかつた。

「なつ、何?!」

「うわッ！」

そして驚いて動きが一瞬止まつたイージスガンダムに不明機のミサイルが命中した。

「グワッ!!」

その勢いは強く、零は爆発した爆風と衝撃によつてすごい勢いで壁に衝突し、煙がまつた。

そして、暫くして煙が晴れるとあちこちボロボロになつても依然立ち続けるイージスガンダムが現れた。零は煙が晴れるとすぐに、巡航形態に変形し、不明機に向かつて加速した。不明機は避けようと回避行動を取り、迎撃をするが撃ち落とせるはずもなく、イージスガンダムは不明機に張り付いた。そして零はイージスガンダムを自爆させ、その時捨て台詞を吐いた。

「負けられないんですよ!! 不明機なんかに!!」

するとイージスガンダムが爆発を起こし、不明機ごと木つ端微塵になつて消えた。すぐさま鈴と織斑先生がやつて来てくれた。

「しつ、零!!」

「大丈夫か！ 零!!」

「う、うん。 大丈夫」



そのあと結局クラス対抗戦は無くなつた。

「ああ～！フリー・パスが～！」（涙）

「何あれ

「さあ？」

この事でクラスメイト達は血の涙を流して いたらしい

第三十一話 一、二組合同授業

（第二アリーナ）

「今回も I.S. を使つての実習だ！ まず、織斑、オルコット、凰 I.S. を展開しろ！」

授業の始め、千冬は声を張り上げる。今日の授業は二組と合同での I.S. の実習の授業だつたのだ。

「ダークハウンド！」

「甲龍！」

「ブルーティアーズ！」

零とセシリ亞と鈴はは機体の名前を呼び三人は I.S. を展開した。三人が I.S. を展開し終わると、千冬が指示をだしてきた。

「よし、展開できたな。

… 0. 3 秒か、まあいいだろう」

めずらしいな、千冬姉さんが褒めて「もう少し早められるようにしろよ？」：

それから零は、足を開いてから地面を蹴り飛び上がった。そして少し飛び回る。しばらくすると地上の千冬から通信入ってきた。

「それでは、急旗下と急停止をしてみろ！目標は10cmだ！」
その通信が切れるごとに鈴が口を開いた。

「零！お先にいただくな！」

「あ、ああ」

鈴は、地上から10cmで停止した。鈴の急停止が終わると次にセシリ亞が急旗下をする。

「零さん、お先に失礼しますわ」
するとセシリ亞も地上から10cmで止まつた。

「ひえく、すごいな」

「んじや！僕の番かな？」

二人が地上に降りて退いたのを確認すると零はダークハウンドを変形させてフルブーストをかけ、急旗下する。そして地上から数十cmのところで高速変形し逆噴射をかけた、数十cmの所で、だ。その高速変形した時にかかるGは凄まじいものだ。

「人よんぐ、グラハムスペシャル！」

しかし、零は現役の軍人であり第二次世界大戦の時の最強と称された『軍神』なのだ。
そんなものは雑作もない。そして、零は某フラッグファイターの台詞を言つて地上十cm

丁度で停止した。すると空気が吹き荒れた。零の急降下に引っ張られた空気が地面に叩きつけられたのだ。そして、しばらくして千冬が零の頭を叩き、怒鳴り付けた。

「普通にしろ！」

「いってえ」

「わかつたな？」ゴゴゴゴゴゴ!!!

「は、はい」

零は千冬に威圧され感覚的に返事をしていた。

それを聞くと千冬が新しく指示をした。

「まつたく……凰、オルコット前に出ろ！一人にタッグを組んで戦つてもらう！」

すると鈴とセシリアは前に出るとセシリアが千冬に質問をした。

「誰と戦うのですの？」

「ど、どいてくださいーー！」

すると上から叫び声が聴こえてきた。零は直ぐに上を見上げた。するとそこにはラフアール・リヴァイブに乗った山田先生が一直線に零に向かって落ちてきていた。

ヤバいじゃないかよ！

すると零はダークハウンドを変形させ飛ぶと、搭載されているアンカーショット山田先生のラフアール・リヴァイブに引っ掻けて空中で山田先生の落下を止めると零はアン

カ一を離して山田先生と一緒に地上に降りた。

「あ、ありがとうございました。織斑君！」

「どういたしまして」

「山田先生が対戦相手だ。」

千冬がそう言うと、二人は山田先生に戦いを挑んで行つた。しかし、数十分後には：

「あなたが！……ガミガミ」

「あなたが！……ガミガミ」

と二人が愚痴りになつてゐたのだつた。そして千冬は騒がしいのを叩き切るように大声をだした。

「静まれ！これで教員の実力がわかつたと思う！教員には敬意を払うようにしろ！」

千冬が叫ぶと同時にチャイムが鳴り授業の終わりを告げた。それから雫達は服を着替えると自室に戻つていった。